
青のブドワール

茨城エリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青のブドワール

【Nコード】

N0367L

【作者名】

茨城エリカ

【あらすじ】

18世紀のフランス。貴族社会の中に生きた「平民」のアレクサンドリーヌから見た、宮廷の落日と主人公の一生を彼女の回想として綴る。

1.「序」

ある女の、他愛もない一生を紹介しよう。

彼女はアレクサンドリーヌ。

18世紀のフランスにブルジョアの娘として生まれ、
貴族の奥様になり、娼婦として死んだ。

この話はアレクサンドリーヌの回顧録メモワールをイギリスで偶然入手した私の、ほんの手慰み程度の

脚色を織り交ぜてご披露しようというだけの物。

時代は移ろいやすく、人々の記憶なぞ春の陽炎のごとく何の頼りにもならないことだし、

陳腐ながらも華やかな宮廷生活とその崩壊を、少しばかり垣間見ることも一興かと思われる。

くわたくし、アレクサンドリーヌ・ソフィー・フロランス・オージエは1760年、パリにて生まれました。

生まれた時のことを詳しくお伝え出来るなぞ、およそ無理なお話でしょうね。

ただ、この日記メモワール（私は回想録という言い方のほうが、余計に好ましく思われます）は

そろそろ人生という何重にも想いのひだがかさなる階段を、ようやく登りつめようとしている今のわた

くしが解けかけた記憶の糸を紡ぎたいだけの、むかし昔の「お話」だと思いきださいます。

わたくしの父はパリで絹織物の問屋を営む商人でした。

顧客の中にはドルレアン公爵様やヴェルサイユの司教様、あのルイ15世国王陛下の公式愛妾として国政をも動かされていたポンパドール伯爵夫人などもいらしたことは、

父のお店の台帳などに残されておりました。それはわたくし達家族がなんら生活に心配などしていなかったという、大きな証拠でございました。ええ、つまりは「ブルジョア」という身分である以外、

何の官職も持たない貴族に比べてもよほど貴族らしい生活をしていたと言ってもよろしいかと存じますわ。 お金ならいくらでも支払う「貴族」のお客様に潤される「平民」のわたくし達・・・

考えてみれば、なんの気まぐれも起こさずにあのまま同じブルジョア出身の殿方と、ありていの結婚で

満足していれば・・・、今こうして薄暗くて隙間風の入る異国の安アパートマンでばやく事もなかったのでしょうか。 あ頃はそんな事考えもしないほど、ただ宮廷に憧れていた小娘でしたから。

わたくしは3人目の末娘として生まれたので、特になんら期待はさ

れていなかったと思います。

父は店を広げる事に精を出し、母はそこそこ広がってきた上流階級の奥様方との社交で忙しく、わたくしは9歳まで乳母のもとで暮らしました。

10歳の時です。

わたくしはアレスの修道院に移っていました。そこでは裁縫や家事、読み書きを教わりつつも退屈な日々を送っていたので、折からの「王太子様ご成婚」のニュースは大変、浮き足立つものでした。

「王太子妃にはハプスブルク家のアントワネット様がお決まりになられたそうですよ。」

ハプスブルク家のお姫様……。

あの女帝、マリア・テレジア皇后の血を分けた、正真正銘のお姫様。田舎の小さな街の沿道にも、若いお妃さまの絵が広まり、まるで「天使のような美しいお姫様」と謳う……。こんな素敵なご結婚はこの世にふたつとないでしょう。そう思ったものでした。

一足先にパリに帰っていたお姉さまに伺ったところ、パリは連日お祭り騒ぎで寝る暇もないそうです。

それから3年後に、わたくしは13歳になっていたのでパリの自宅に戻るようになります。

丁度時を同じくして、王太子殿下と王太子妃殿下のパリ訪問が行われ、パリでは振る舞いのワインがあふれ、沢山の芸人、鳴り止まぬ音楽、降るような花飾りの波、色とりどりのお菓子、夜空を彩る花火と田舎暮らしをしていたわたくしにはかなり刺激的な帰宅となりました。

自宅のバルコニーから、そっとお二方のお顔を拝見したわたくしは、そのあまりに豪華なお妃さまのドレスに目がくらみ、立ち上がれな

い程でしたわ。

あふれるリヨンの妖精の羽根のようなレース飾り、花飾りと金糸で縁取ったオパール色の絹のドレスに夜空の星を編み上げてしまったようなダイヤとパールのネックレス・・・。

あのお方・・・王太子妃マリー・アントワネット様にふさわしいお召し物であることは言うまでもありませんが、誰だつてあのような絵から抜け出てこられたようなお姫様を見てしまったら、わたくしのような小娘が憧れを抱くのは当然でしょう？

あの日のあの瞬間から、わたくしには何か小さくとも燃えるような決意が心の中で生まれてしまったことは、止めようもない事実なのでした。

「お妃さまのようなドレスを着てみたい。

いつか、あの方の宮廷に参じてみたい・・・。」

田舎育ちの町人の娘にとって、そう言った憧れはエデンの園と同じ意味をもつものです。

ただ、そこにある禁断の木の実にはまだ気づいてはいなかったのですけれど。

あるいは気づいていたけれども、気づかぬ振りをしていた、とでも言うべきでしょうかしらね・・・。

パリに戻り、まずは「当世ブルジョアのご令嬢」にふさわしい教養と作法を母や教育係のマーニユ夫人とアンリ・ブランシャール（この男性は恐らく大学生で、当時歴史や文学などをブルジョアの子弟に仕込む、家庭教師のようなことで生計を立てていたと思われる）から教わっていました。

マーニユ夫人の口癖はこうです。

「マドモアゼル・オージェ、エレガントであること！！ただそれのみです！」

お食事をマーニユ夫人とご一緒する時など、それはもう戦々恐々としておりました。

あの方にはまるで身体中に眼がついているかのように、離れた席のわたくしに向かって、

「スプーンを口元に運ぶ時に、背中を曲げてはいけませんよ！それでは、まるでロバのようです。」

「デザートは全てのお食事皿が引いてからです！！」
アントルメ

「にこやかな笑顔でお食事中も絶え間なく全ての者に眼を向けること！お食事がメインではありませんのよ！会話がメインなのです！！」

ねえ、いかがなものですか？これではまるで軍隊のようでしょう？そこに給仕が美味しそうで繊細なお菓子を持ってきても、なにをいただいているのか、その甘美な味わいも消し飛ぶのですから。それが作法と言われてしまえば、ええ、本当にあのマダムのおっしゃる通りなのでしょうけど。あの方の教育のお陰で、わたくしのような平民出の者でも、

数年間は大変な生活出来たのですものね。もちろん感謝はしております。

それに引き換え、あの麗しのアンリ先生はそれは素敵な青年でしたわ。

わたくしのはじめて抱いた淡い恋心・・・などという物があるとしたら、それはきつとあの方に対しての幼い想いでしょうね。

いつだってアンリ先生のお話してくださる神話や歴史、文学の世界はまるで玉手箱のように、キラキラと輝いておりました。

先生が朗読なぞされる日は、母までも髪を結いなおして勉強部屋に押しかけてきたものですから、わたくしは少々不機嫌になったものでした。先生との二人きりの時間を邪魔されることが何より不愉快でしたの。子供の憧れだったとは言え、女性というのはたとえ何歳でも恋の炎に水をさされる事に対しては、ひどく敏感になるものです。ね。懐かしいけれど、あの頃の幼く瑞々しい気持ちがい思い出されず。

アンリ先生がいらっしゃる時間までに、わたくしは覚えてたのお化粧をして、髪は毎回小間使いに違う結び方をさせました。ア・ラ・モード流行をさりげなく取り入れなければ、先生に野暮ったい田舎娘と思われるてしまいますもの。

髪飾りはわたくし、いつもピンクのバラや沈丁花が気に入りでした。ですからドレスにも必ずバラの花飾りで縁取っていたかどうかクチユリキル服飾人をお願いしたものですわ。彼女はいつだって少女の夢を代弁してくださる繊細なドレスを仕立ててくださいました。けれども、のちのちにあの

ローズ・ベルタン（マリー・アントワネットの専属デザイナーとなつた服飾人）にかなりの顧客を奪われてしまい、とうとうドイツに渡つたと聞いております・・・。

香水をふりまき、しなをつくり、胸元の大きく開いたデコルテで着飾ってみても先生はわたくしの魅力を詩に詠んで下さる事など、一度たりともございませんでした。

そしてある時、先生がわたくしに手紙の書き方を課題として出され

た時に、なかなかお戻りにならない先生を探して屋敷中を歩くうちに決定的なものを見てしまったのです。

母の薄紅色と金の装飾で飾り立てた主婦部屋フドワールの寝台に横たわるのは、間違いなく母と、

アンリ先生でした。

母のあられもない姿が、こんなにも美しいと感じるのはきっとアンリ先生のギリシャ彫刻のような姿態に抱かれているからでしょう。哀しみとも怒りともつかない涙でお化粧が流れないうちに、わたくしは

そつと書斎にもどると先程の課題に取り掛かりました。

「遠くに恋人を想い慕う恋文」というお題目の手紙は、その日アンリ先生からほぼ満点をいただきました。こうして、わたくしの幼い恋はまことにあっけなく終わってしまったのです・・・

わたくしがルソーの「新エロイーズ」ヌーベル・エロイーズのような、そんな恋愛を求めながらも毎日の課題に忙しくしていた頃、ルイ15世国王陛下が崩御されたのでした。

2、

ルイ前国王陛下の棺が人知れずサン・ドニ教会へ運ばれている頃に、すでにヴェルサイユ宮では新たな治世の幕開けによせる期待が、怒涛のようにお若い新国王とお妃さまに向かって押し寄せていたのです。

今日、お父様がヴェルサイユ宮のド・ブラモン伯夫人にお届けしたうぐいす色に金糸や銀糸で桃の花や小鳥の模様が入った絹織物を、お妃さまの女官長であられるノワイユ伯夫人にとてもお気に召していただき、これから顧客になっていただけるとお声をかけていただいたそうです。お父様はそれは上機嫌で帰ってまいりました。

あのタフタ地が一体お幾らほどののか、ご存知なのかしら？
仕立てられたドレスにはまだまだ沢山のパールや花飾り、シルクのリボンで縁取りレースが洪水のようにあてがわれ……

ああ、あの頃の服飾の素晴らしさや豪華さは、いくら筆をつくそうと思ってもなにか上滑りな表現になるだけ。空しいだけですわね。

次から次へとタフタ地の注文が宮廷貴族の方がたから届くようになると、我がオージェ家はパリでもかなり裕福といっている暮らしをしていました。

わたくしはこの4月に、同じくパリにて宝石商を営むベーマー家の奥様のサロンに出ることを許されておりました。その他にも、香水商、本問屋、画商などといったお宅の奥様たちはそれぞれが素敵なサロンを開いていらしたので、わたくしは皆様からそれは多くのおはなしを伺うことが出来ました。

世界はまっすぐにどこまでも平坦ではなく、何ヶ月も山を越え海を渡った先にある極東の黄金島のお話や、お隣のイギリスでは紅茶が好まれ、午後のお茶は貴婦人の大切なたしなみなのだとか、コメデイ・フランセーズの新作についての評価、ヴォルテールがバステイーユに投獄された時の逸話だとかいった面白おかしいお話や経済、哲学に至るまで、それはとても判りやすく噛み砕かれてわたくしのような若い娘にも充分に吸収できたのでした。

哲学者、大学生、貴族の若奥様、女優、軍人、弁護士、画家……あらゆる階級、身分の方々のお話には月星のきらめきがあり、花の彩りも大樹のような知性もありました。

オーロール・リドーは、その頃社交界で知り合った友人です。豊かなブルネットに青緑の大きな瞳、賢そうな額や鼻筋は白い陶器の肌につつまれていました。

お婆様がスペインの方だったそうです。お家は織物工場をいくつも持つ実業家でした。

どちらかというところとあけすけな人柄で、華やかな雰囲気の彼女にはいつも殿方の取り巻きが数人、尾ひれのごとく付いてまわっていたものでした。

オーロールはわたくしにある時、こう言いました。

「ねえ、わたしのようないパリの娘にだってチャンスがあるわよ。お父様は今度、競売で爵位をお買になるみたいなの。そうすればわたしにだって貴族の奥様になる権利が出来るのじゃなくて？」

商人はあふれる財にまかせ、いまや平貴族（宮廷貴族のような官職はなく、代々続くお家柄でもない）としてパリの街を牛耳っていたのです。

「オーロール、あなたならそんな事なさらなくたっていくらでも良い嫁ぎ先はあるのではなくて？」

わたくしのお母様はあなたがオリヴィエ・ド・エーヌ様と結婚されるのでは、とお話していたわよ。」

オーロールは高い鼻すじにしわを寄せると、

「何故わたしがあんな田舎の没落貴族なんかと？ご冗談を、でしょ？！」

ド・エーヌ様は当年30歳で、はじめの奥様を初産で亡くされた後にご領地に引きこもっておられたそうです。確かに、そんな暗い雰囲気の殿方は、虹色にかがやくオーロールには似つかわしくないように思えました。

そんなふうに、まだ恋も愛も見分けがつかないようなわたくしたちにも、やがて親がお膳立てをした相手の方に嫁いでいくのです……。

オーロールはそのお父様ゆずりの野心の末、2年後の17歳になったばかりの春にド・ロレーヌ伯爵の元に嫁いでゆきました。（正直に申し上げると、ド・エーヌ様のほうが見目の良いお顔です）取り巻きの中には、あの頃ドイツからの流行小説「若きヴェルテルの悩み」の主人公さながら、失意のあまり拳銃自殺まで試みようとした殿方さえいました。

そうしてわたくしにも、17になるかならぬかで縁談がつぎつぎと舞い込むようになったのです。

少なからず貴族の方からのお申し出もありました。

しかし、わたくしはその時にベズンヴァル男爵家の舞踏会でお知り合いになれたファルケンシュタイン伯爵さまをお慕いする気持ちでいっぱいになっていたのですから、そう簡単には花嫁衣裳など着る気持ちになれませんでした・・・。

あのお方はウィーンの宮廷での出来事を甘やかなフランス語で描いてみせて下さいました。

テレジアン・イエローの王宮に輝くいくつかの素晴らしい恋物語の終わりに、あの方は花びらのような唇吻^{キス}をしてくださったのです。洗練された身のこなしや巧みな会話、優しい笑顔はパリ中の噂になり、それゆえ、あの方の真のお姿が案外と早く知れ渡ることになったのです。

3、

1776年の秋の頃でした。

わたくしがベズンヴァル男爵家の舞踏会にお母様と共に赴きましたのは、本当に奇跡のような幸運だったでしょう。きらめく宝石やシャンデリアの洪水の中であの方と踊ったメヌエットは後にも先にもこれ以上には踊れない優美なものでした。

ファルケンシュタイン伯爵は、音楽が終わらぬうちにわたくしを広間からお庭の噴水まで手を引いていかれました。

つばらな青灰の瞳は自信と気品にあふれ、粹で華麗な紳士服に金色のベストがよくお似合いの紳士……。わたくしが恋しても不思議ではありません、何故ならその頃の上流社会の貴婦人方のほとんどが、あの方に恋焦がれていましたから。

あの方はささやくように、

「お名前を伺ってもよろしいでしょうか？マドモアゼル。」

と手に軽くあいさつのキスをくださいました。

わたくしは手と胸の震えを抑えながら、精一杯の笑顔を向けようと努力しましたが、果たして鏡無しでは自慢のえくぼがキレイに出揃うように笑えたかどうか、確認のしようもございません。

「アレクサンドリーヌ・オージェと申します。

はしたなくも貴方のお名前はすでに御婦人方のお話から伺っております。パリはいかがでしょうか？」

「まったく飽きませんね、この街は。刺激的過ぎて帰国を延ばしはしにしている次第ですよ。」

あなたのように妖精ニンフのようなステップを踏む御婦人にお会いできるなんて光栄です。」

「伯爵さまこそ、まるでオルフェウスの恵みをお受けになっ
ていらっしゃるようですね。」

あのように軽やかに踊ることが出来たのは貴方の流れるようなリ
ードがあったからでしょう。」

秋の夕べは少しばかり肌寒く、わたくし達はお互いにどちらからと
もなく寄り添うと再会のお約束としてキスを交わしました。

ああ、もちろんわたくしだってそのような一夜の口約束など本当の
ところ、信じるなんて幼げな事などありえませんが。ただ、もうひ
と目だけでもお会いして一度限りの抱擁でも構わない・・・あの時
はただそれだけがダイヤのネックレスや金とパールの髪飾りティアラなどよ
りも、一番欲しかったもののなのです・・・。

それははかない、望むべくもない夢だったのだと悟ったのは、お母
様の友人であったフーシェ様から聞き及んだお話からでした。

あのファルケンシュタイン伯爵というお方の本当のご身分、真のお
姿は神聖ローマ帝国皇帝・ヨーゼフ二世陛下・・・つまり、我が
フランスの王妃アントワネット様のお兄様だったのです。

「フーシェ様、そのようなお方が何故、このパリの社交界にまでい
らしたのです？」

ヴェルサイユに国王陛下ご夫妻への伺候のみが目的ならば、なぜ、
こんな・・・。」

その後は言葉にならず・・・いえ、言葉にしてみましたたらあの方との淡い思い出までが一瞬のうちに吹き飛ばされてしまうのではないか。そんな愚かな気持ちにまでなりながらわたくしはあのお方のことを想い慕っていたのでしょうか。

フーシエ様はやれやれ、ここにもまた可憐な恋の犠牲者が・・・とても言わんばかりに頭^{かぶり}を振ると、こう言われたのです。

「皇帝陛下は妹君であられるアントワネット様をご訪問されるといふ名目も確かにお持ち合わせのようですが、それよりも何と云うか・・・羽根を伸ばしに來たのも事実ですよ。

そら、先にヴェルサイユから追われたデュ・バリール夫人にお会いするため、わざわざリユーヴシエンヌのお館をご訪問されたそうですね。それはもう楽しくお茶やワインなどでご歓談なさった時に、デギヨン公やモールパ伯が一緒されたそうですから・・・。デュ・バリール夫人をあまり好ましく思われていない王妃さまはかなりのご立腹だった、と皆の口の端に上っております。」

デュ・バリール伯夫人が、あのお方のご訪問を受けたなんて・・・。

前国王の愛妾だったデュ・バリール夫人は、いったんは尼僧院に送られたにも関わらず、宮廷で築き上げた人脈とその助けに負い、現国王陛下のお取り成しで今はまた以前のように貴族のような暮らしをしているかつての、いいえ、現役の高級娼婦^{クルチザンヌ}・・・。

まさかあのような高貴な身分のあのお方が、そんな島流しにあつてもおかしくない女性の元に参ずるなんて・・・！！

そんな事が許されるのなら、まだわたくしのようなブルジョアの方があのお方に相應しいはずなのに！

なぜ、あの方は……。

いいえ、本当はわたくしには既に判っていたのです。

殿方にとって、女性は素晴らしい花のような飾りでなくてはならないことを。

粹な会話と恋愛を、自由に楽しめるためのゆたかな感性を持つ大輪の花でなければ決して貴婦人として扱われないことを。

そして、それはまだ当時のわたくしにはまるで持ち合わせてはあらず、

デュ・バリー夫人には確かにそれが、備わっているという事実を……。

あの女性にはなにか他人を惹きつけてやまない「何か」があるので

それを「魅力」という一言で片付け、納得させられることなぞ幼かった小娘のわたくしには到底出来ないこと……それだけだったのです。涙はもはや外には流れずに、暗く深い心の深淵に澱み、枯れることのない悲しみの泉を満たそうとしていました……。

フーシェ様は暗澹としたその場を取り繕うように、明るい話題でもという風に言われました。

「そうそう、アレクサンドリーヌ様は近々ご婚約でしょうな。

わたしの店の一番美しいレースを花嫁のケープに仕立てていただきましょう。

恋も愛も、すべては家庭を築き、立派な奥様になられてからで充分なのですよ。」

「……わたくしが婚約ですって？」

「ええ。おや、これは失礼、花嫁になれる方より早く、わたしが先んずるなんて申し訳ありません。

ただ、お父上はどうやらあなたとド・ラカーユ伯爵とのご縁談を進めておられるそつですよ。」

「ド・ラカーユ伯爵・・・さま？」

「ヴェルサイユにてお父様が出納長官補佐をなさっておられる、立派な若貴族さまですよ。

もしわたくしに年頃の娘がいたら必ず縁組をお受けいたしますけどね。」

思い切り失恋の雨に打たれたかと思うと、縁談話という晴天の霹靂。もはやわたくしには考えるほどの気力はありませんでした。

17歳になろうとするわたくしに失恋の痛手を癒す（と言うよりもむしろ失意の紛らわし方を模索する）暇もないほど、ド・ラカーユ伯爵家からのお使いがひんぱんに来るようになったのは、そろそろ冬になろうとする頃でした。

4、

アルベール・エルマン・ド・ラカーユ伯爵とは、おそらく半年ほど前にル・ブラン夫人の舞踏会でお会いした（らしい）と言う事と、その方がその時にわたくしとワルツを踊った（らしい）と言うこと、そして伯爵家では有能な出入り商人との財力の結びつきを欲していた、という事がその冬の間知りえたことでした。

ド・ラカーユ伯（アルベール様のお父様）はこう申されたわ。

「今、貴族はより強力な市民との結びつきを考えねばなりません。それはつまり財力という点においてです。

あなたのようなお若いご婦人にはあえてこの言葉は使いたくはありませんでしたが・・・

政略結婚だと考えて下さっても結構です。ただ、この縁談はあなた自身にも実りあるものだ、わたしは信じておりますよ。」

のちになって、わたくしはこの時の義父の言葉はなにを言わんとしているのかようやく判ったという次第でした。あまりにも貴族という身分を過信していたのかも知れません。

宮廷の出納長官についていた義父には、ヴェルサイユの財力などすでに底が見え始めているのをすっかり理解していらしたのでしょうか。

新年にはお顔もおぼろげな印象のアルベール様からカードをいただきました。

春までにはわたくしのための屋敷も用意しましょう、と結んでありました。

結婚・・・。

あちこちに散らばる点と線が、自分とはまるで関係ない力によりわたくしに向かつてからみつくように、自分の意思などはおよそ使うに及ばないと言われているに等しいこの状況に何故かわたくしはほんの少しだけ満足していました。

もちろん、あの恋しいお方に対する想いを忘れてしまった訳では決してありません。

ただ、わたくし達はどんな時でも「明るさ」も「希望」も見出せないなどという感じ方は恥ずかしいと教えられてまいりました。

とにかく、前向きに生きる。快樂と優美に身を包めなければ、どのような高貴な身分の方でもそれは貴婦人とは言えません。

アンリ先生にも、あのお方にも後悔させるほどの「貴婦人」になること。

立派な結婚をして子供を生み、社交にいそしみ恋愛を愉しみ、人生を謳歌する、それこそが女性の選ぶべき道だと信じてきたわたくしにとって、もう迷うことなどありませんでした。

さようなら、愛しい貴方。

さようなら、まるですみれのように可憐でちつぽけだったわたくしの幼い恋。

わたくしはいつまでも涙に顔を曇らせるバカな小娘ではありません。光のあふれるヴェルサイユにふさわしい、輝く貴婦人になってみせましょう！

そのためには、あなたとの思い出すらサロンでの笑い話にしたって構いません。

心が重くなるような荷物なら捨ててしまった方が前にはゆけます。

さようなら、ただの娘に温かなキスをありがとうございました・・・。

アルベール様との結婚が決まり、わたくしたちは春の訪れとともに神の御前で夫婦の誓いをたてたのでした。

落ち着いた雰囲気の方はわたくしより8つ年上でした。

思慮深く、寛容で決して周りを困らせるような方ではない、お優しい殿方です。

わたくしは夫を心から尊敬できたことを感謝しております。

わたくしたちはパリに程近いブローニュの森の南のお屋敷におりました。

実家からわたくしのためにシャンタルとレティシアという侍女がついてきてくれたので心休まるのです。その頃から再び、あのド・ローヌ伯に嫁したオーロールとひんぱんに会う機会に恵まれたこともわたくしにとっては心強いことでした。

朝は日が高くなるころに起き、お化粧の後にお散歩、ハーブのお稽古、お昼をお屋敷で夫とふたりでいただいてからはオーロールにいろいろなお屋敷のサロンに駆り出され、社交をしなければなりません。

夕刻には演劇やオペラ、音楽界に出かけそのあとに夜食・・・もう夜はすでに明け始めている頃、やっとベッドに着けるのです・・・。

この殺人的な日課をこなすのに、わたくしは何度も一日がもつと長くなりますようにと祈ったものですわ。まるで毎日がパーティのように、わたくしのまわりの人々も常に動き回っていたのです。

やらなければいけない事、やりたい事、やらざるを得なくなる事が同じ時間の中でいくつものレース飾りのように重なり、身体中に巻きつきがんにがらめに縛られそんな息苦しさを感じてくると、わたくしは決まって、1、2日ほどの「風邪」をひき、主婦部屋にこも

ブドワール

つてお手紙や日記をつづつたり、読書を楽しみ、香水ビンフラスコンのコレクションの模様替えをしたりと少々のがス抜きをしたものでした。

わたくしのブドワールは水はなだ色の美しい壁に白い装飾が施されており、白地に桃色や紅の小さなバラを刺繍したソファや安楽椅子・寝台を揃え、金や瑪瑙、琥珀や紅玉で彩られた書き物机レキローなどがありました。窓からは裏庭の花壇と小さな噴水をのぞめ、裏につづく林と森の向こうに、黄金に輝くヴェルサイユを遠くに認めることが出来ます。パリの喧騒から逃れてこの愛すべき空間で自分を取り戻すことが、今にして思えばその頃の一番の幸せだったかも知れません・・。

マダム・ド・ラカークと呼ばれ、パニエのドレスを季節ごとに新調し、帽子や靴ミュール、ジュエリーを流行に遅れないよう買い求め、サロンを開くために教養と感性を磨く日々、わたくしは不満があった訳では決してありません。むしろ、この縁談でわたくしは「平民」から「貴族」になったのですから、一步ヴェルサイユに前進出来たことを誇りに思ったほです。

友人のオーロールなどは不満気に、

「いつになったら夫は出世するのかしら？あの人がヴェルサイユに本気で伺候する日を待っていたら、わたくしシワだらけのお婆ちゃんになってしまっわ！！」

などと言っては相変わらずのオペラ座通いに馬車を駆るのでした。

オーロールは美人である上、華やかな身なりに王妃様のように優雅な振る舞い、あふれる情熱の持ち主であったのでいつもお取り巻きの殿方が列を成していました。

以前にもこのような状況の彼女でしたが、結婚してからさらには艶やかになったことでその香気にあてられない殿方などはないのではないか、と当時は本気で感じておりました。

現に、わたくしの義父も彼女にダイアモンドのネックレスや中国趣味^{スリ}を模した金細工の飾り箱を贈っていたのには驚きました。その代価として彼女は我が義父とどのような関係だったのかは飾り箱の裏側に刻印された「我が宵の明星は永遠に輝けり」と言う銘で一目瞭然です。

とは言え、他人の色恋になんら関与も関心も示さないことが「大人の流儀」であり、立派な「紳士」と「貴婦人」である以上、それはわたくしにはどうしようもない事です。

そのように日ごと夜毎に艶めくオーロールの勢いに今やパリの貴婦人たちは称讃と罵倒が入り混じる評価を下すのでした。

なかでもフランシーヌ・ド・モンテクルは、「わたくしこそパリの夜会の華」と言わんばかりの鼻持ちならない高飛車な方でしたので、オーロールの姿を同じ舞踏会で見かけた時などの意地の悪い問答などは、そばで聞いているわたくしの方が麻疹にかかりそうに気分が悪くなったものですわ。

「あら、ごきげんいかが？ マダム・ド・ロレーヌ。

先日は伯爵さまからたいそうなボヘミアン・クリスタルの花瓶をありがとうございました。

そんなことなさっていただかなくても、わたくしは伯爵様とでしたら何時でも遠乗りを一緒にいたしますとお伝えくださいませね。」

オーロールにはすでに自分の夫とフランシーヌが密かな遊び相手と判っていたのでしうし、今さらド・ロレーヌ伯の恋愛遍歴などはもうどなたも聞き飽きていたところでしたので、もう少しマシな誇示の仕方を彼女が習得してくれるようにと扇の陰でため息をついて

いたのですが、オーロールのやり込み方にもまだまだ貴婦人とは言い難い直情的なものでした。

「マダム、花瓶をお気に召されたご様子でわたくしも嬉しく思いますわ。」

夫がいつもお世話になっておりますもの、ありふれた小物では失礼にあたるといけませんからね。

わたくしとドミニク・ボードウアンとで、寝ないで考えたお品ですよ。ぜひ、奥様のブドワールでお花を生けて下さいまし。」

その場にいた一同が笑いをこらえたのは言うまでもありません。

ドミニク・ボードウアンとは、フランシーヌがその当時熱を上げていた若い俳優でした。

涼しい青い眼、鼻筋の通った褐色の髪青年は事実、オーロールの庇護のもとで暮らしていた恋人の一人です。

扇を広げて怒りに震える唇を隠そうしながら急いでその場から立ち去るフランシーヌでしたが、毎回このようにオーロールが勝利したわけではありませんでした。こう言ったりやりとりはもうどちらの舞踏会に行っても必ず誰かしらが交わしていただけの物。誰かがあざけりの対象になると、次の夜にはまた別の対象が生まれる……。ねえ、女の世界と言うのは常にこうしたものではございませんこと？表面ではにこやかに、明るくいかにも優しげに振舞いつつも、その心の奥からにじみ出てくる悪意を言葉のどこかに含ませておきたいのがわたくし達の日常会話なのです。

そのことがあってから数日後に、コメディ・フランセーズの若手俳優、ドミニクは役を降ろされたのでした。それが、誰の差し金であ

るのは容易に想像出来ましょう。哀れな青年俳優はそれからすぐに、オーロールにも飽きられ、捨てられた猫のようになってパリの橋の下で暮らしたそうです。

一人の人間を自分たちの飾りのように見立て、力関係の道具にし、都合が悪くなると闇へと投じる……。これが当時の、当たり前過ぎる人間関係であったのは事実です。そこになんの感情の澱みが生まれないはずはなく、この女性達にとってはほんの小さなこの出来事が、後に大きな運命の嵐となって二人を呑みこむ事になるのです……。

5、

結婚して2年もする頃に、待望の子供を授かることが出来ました。

初めての事なので、わたくし自身もいささか不安ではありましたが、とても不思議な感覚ではありました。自分の中に、もう一人の（しかもまったく別の！！）人間がいるなんて！

日に日に重く、大きくせりあがってくるお腹を見ながら母になる悦びにひたったり、あるいはスタイルが崩れるのでコルセットをぎゅうぎゅうに縛り上げないとみつともないわ、などと憂鬱になつてみたり鱈のパイは赤ん坊と母親によくない、と聞くと食べなかつたり、小さな赤ちゃんのための産着に刺繍をさしてみたり・・・

そんな時、侍女のシャンタルは

「奥様、きつと男の子ですよ。奥様のお腹の張り方は大きいのですもの。」

「まあ、シャンタル。では女の子ならこんなに大きくはならないの？」

「ええ。わたしの姉はこんな大きなお腹でしたもの。お顔もお化粧なさらずとも、はつきりされているでしょう？そういう時は、きまつて男の子ですよ。」

レティシアも頷きます。わたくしのお腹までひざ掛けを引き上げてくれながら、

「奥様は今、とにかくブリオツシュがお好みでしょう？お生まれになるお子様も、きっとブリオツシュが大好物なお子様ですよ。」

「あら、まあ！では、わたくしはお腹の子の好みで食事をしているって言うことなの？」

「もちろんそうですとも。」

夫も、義父も、もちろん実家の両親も初めてのお産を気遣ってください、毎日のように花やお菓子や本といった贈り物をしてくださいました。

オーロールも、週に一度はきまってお使いを我が家に遣し、お手紙や花をくれました。

そうしているうちに、激しい痛みとともに、伯爵家の跡取りであるアンリ・ジョゼフが生まれました。

夫が30歳、わたくしが19歳の夏でした。

アンリは乳母のコレットのもとに預けられ、わたくしは産褥と闘わなければなりませんでした。

毎晩のように高熱が続き、悪阻のような体調不振・・・

頭が割れるようにしめつけられ、出産とはこんなにも犠牲を払うものなのかと、恐ろしくなりました。

秋の終わり、わたくしの産後の肥立は悪く、とうとう出血をするようになってしまいました。

夫よりも早く、シャンタルとレティシアはパリに評判のよい医師がいる、と聞き及んでいたので二人に従い、パリのサンソン医師を訪ねたのでした。

鬱々とした曇り空の下、何度か失神しかけながらパリの裏町長屋のある一角に馬車が止まりました。

パリで生まれ、パリに実家がありながらわたくしは今までこのような街は見たこともありませんでした。あちこちにネズミがたまり、住人は見るも無残な粗末な服装、顔は何日も洗っていないかのよう
に土気色……。異臭というよりはすでに毒ガスのようなものが立ち込めているようです。わたくしは堪らずに馬車の下で嘔吐しかけました。

シャンタルとレティシアに支えられながら、街の様子が頭のなかで
メリー・ゴー・ラウンドのように早まわして回転しています……

そのうらぶれた街の隅に、なにかペンキのようなもので書きなぐられたような跡のある一軒の家がありました。

「奥様、お気を確かに！ここまで来ればもう大丈夫ですよ、先生がきつと助けてくださいます。」

ほとんどなだれ込むように、その家に入るとそこには40がらみの男性がおりました。

殺風景な居間から奥の部屋に通され、部屋の中央に木製の簡素な寝台が眼に入った時にわたくしは出血と共に意識を失ったのでした。

何時間、いえ、何日間経ったのか正確には覚えておりません。気がつくところには小さな部屋のベッドの上でした。

どこからか、子供のはしゃぐ声と、母親がたしなめる声、食器がふれあうような音などが聞こえます。

「奥様・・・？気がつかれましたか？お加減はいかがですか？」

傍らではレティシアがわたくしを心配そうに覗いていました。彼女に応答しようとしたその時に、ふと部屋のドアをノックする音。レティシアはドア越しに誰かとお話してから、

「奥様、サンソン先生に今、お薬を処方していただいております。服用の仕方などを伺わなければいけませんので、ほんの少々ですが席を外しますわね。お待ちくださいませ。」

レティと入れ違いで入ってきたのは、まだ年の頃で12、3歳ほどの少年でした。

小綺麗なシャツを着ているので、一瞬、この街に似つかわしくないとさえ思ったほどです。

明るい青灰の眼には物憂げな光がさし、チャコールの巻き毛がかわい。その少年はそそくさとテーブル脇に水差しとコップを置き、

「マダム、他に御用はありませんか？具合は・・・いかがですか？」

いかが、と言う言葉が反射的に出てこないところが妙に可愛らしく、わたくしがついふつ、と笑ってしまうと少年は真っ赤になつてうつむいてしまいました。気の毒なことをしてしまったわたくしは、取り繕おうと思い、では、と彼に手を伸ばして言いました。

「笑ったりしてごめんなさいね。具合はだいぶ好いですね。お水を少し、いただけるかしら？」

でもね、わたくし一人だとまるで根が生えてしまったように動けませんの。手を貸していただけませんか？」

「ええ、マダム。」

少年はわたくしの背中に手をまわし、半身を抱えて起こしてくれました。近くで見るとまるで天使のような面立ちをした賢そうな美少年です。子供とは思えないほど、力もありました。

少年の助けでやっと水を得られたわたくしはとにかく生き永らえた事、今日のパリは晴れていること、目の前の少年の美しさにさえ、神に感謝せずにはいられない程に安堵したのです。

「お名前を伺っていませんでしたね？わたくしはアレクサンドリーヌ・ド・ラカーユ。」

「ボクは・・・アンリです。アンリ・サンソンと言います。」

「美味しいお水をありがとう、アンリ。わたくしの息子と同じ名前ね。」

ところで今日は何曜日？あなた、学校はよろしいの？わたくしのせいであなたがお勉強をする時間を取られてしまったとしたらお詫び致しますわ。」

アンリは、ちょっとだけ困った表情をすると仕方無しにという風に笑顔をつくってからこう言いました。

「ボクはお父さんの仕事の手伝いがあるので・・・学校には行って

いません。

これは・・・あなたのせいではなく、ボクたちの仕事なんです。」

ふとぎこちない空気が流れた時、レティがお薬を持って入ってきました。

「まあ！奥様！！起き上がりたりして！！ この悪ガキったら、奥様の具合が悪くなったらどうするの？ さあ、馬車を呼んでちょうだい！！アンタみたいな人間がこの奥様とお話するなんて、本来してはいけなはずでしょ？！ほら、さっさと行きなさいな！！」

レティの剣幕に驚いたわたくしは、こう言うのがやっとでした。

「いいえ、レティ。わたくしがアンリに頼んでお水をいただいたのよ。ねえ、そんなに怒ることは何ひとつしていないわ。アンリ、ごめんなさいね。レティは疲れて気が立っているだけなのよ・・・」

そう言い終わらないうちに、アンリは顔面蒼白になりながら部屋を飛び出してしまいました。

レティシアはシャンタルと一緒になにやらブツブツ言いながら、手早く身支度を整えてくれたかと思うと、馬車（恐らくはアンリが拾ったであろう）に荷物を詰めて、わたくしの介添えをしながら乗り込み、そうして慌しくその街を後にしました。

帰路につく途中の車内で、わたくしはレティの少年に対する失礼な言動を諫めますと、あるうことが逆にこちらが咎められることになってしまいました。

「レティ、あなたのアンリに対する態度はとても立派な大人の態度

とは言いがたいものでしたわよ。

あの可愛らしい少年はわたくしに何一つ嫌な思いなどさせはしませんでした。むしろ彼のお陰でとても救われた気持ちになったのですよ。あなたとわたくしはアンリに対してお詫びしなくはいけません。

「

レティは大袈裟にため息をつくとき暗い目つきでわたくしを見据えました。

「奥様のご容態がかんばしくないので、やむを得ずにあの医者のもとに行つたのですよ。本来なら奥様のような身分の方が行かれるような所ではございません。それは奥様にもお察ししていただいた事と思います。あのサンソン医師は・・・とても評判の、腕のある医師です。ですが、本当は医師ではございません。」

「・・・医者ではないですって？どついう事なの？」

「旦那様もあそこに奥様をお連れすることに初めは難色を示されましたが、サンソンの評判を他の貴族の方がたに聞き及んでからはご了承されました。あの男に奥様のお身体をお見せするなど、なかなか耐え難いとお考えだったでしょう。」

「レティ。サンソン先生は何者なの？」

「・・・あの男はムツシュウ・ド・パリです。」

シャルル・サンソンはこのフランスで死刑執行人のありがたくない称号を授かる者でした。

代々、執行人の家系でその生活は差別から逃れることは出来ません。アンリが学校に行っていないのはそういう理由からなのでした。

同じ人間に死の制裁を加える権利（義務？）を負わされた闇の住人が、パリで医師をしているなんて・・・これほど皮肉な話はあるのでしょうか？

人間になるべく苦痛を与えずに死を与える事に長けている一族の熟練した技術から、人間の身体の機能に精通した治療法が生み出される・・・死神の仕事を手伝いながら一方で天使のような行為に実を費やすなんて、その心の底では一体どれほどの葛藤が生まれていたのでしょうか。

アンリの寂しげな青灰の瞳には、いくつもの命のやりとりを見てきた哀しみが映っていたのでしょうか・・・。そうしてあの美しい少年も、いつか運命のままに執行人として両手を血に染めるのでしょうか・・・？

冷たい死の恐怖にそぐわないほど、少年の頬は紅く、手のぬくもりは春の陽だまりのようでした。

不思議なことに、わたくしはそんな話を聞かされてもなおアンリ・サンソンに対しての嫌悪感などはまったく生まれず、むしろ後日サンソン医師への報酬とともにアンリにあてて、手紙をしたためました。

この時すでにわたくしはアンリとの再会を心の奥で望んでいたのかも知れません。

あの牧神のような少年は、わたくしの手紙をきつと読んでくれるでしょう。

その中に入っている懐中時計はわたくしがアンリ（息子）の出産祝

いで義父にいただいたブレゲの時計と対に作らせた金細工のもので
す。ふたの裏には銘とわたくしのイニシャルが彫っております。

「愛の泉は御身の心に」

少年がこの言葉をどうとらえるのかは自由です。
わたくしが男性にこのような贈り物したのは、生まれて初めてで
した。

時折、息子のアンリに会いに田舎に行き触れ合い、郊外の領地内にある別荘を周り乗馬や散歩、地方にお住まいの夫の親族のお館に呼ばれたり・・・

またパリでの喧騒を考えるとこうした田舎遊びはホッと出来る時間でもありました。

わたくしたちの日常は型で押したように単調であるのですが、この枠からはみ出す事は許されることではありません。

朝のお化粧をお集まりの殿方にもご披露し、楽器や朗読のレッスンにカード遊び、お芝居やオペラの合間に恋愛に走り美食と快楽、怠惰と浪費、恍惚と感傷、明朗と虚飾、高慢と・・・

ああ、こんな混乱はきつと本当の貴族に生まれていれば、なんの疑問も持たずに過ごせたのでしょね。

毎日があまりに目まぐるしいパリでの生活に、少々の疲れがあったのは出産を経験したからでしょう、

何も不満のない暮らしの中で、ふとどうしてか不安になるのは、大きかったお腹がいきなり空っぽになってしまったからかも知りません。

わたくしは今までにもまして、お気に入りわたくしのブドワールに籠ってしまう日々が続いたのでした。

そんなわたくしを案じてはオーロールや姉たち、両親、複数のお友達を訪ねてきてはこう繰り返すのです。

「ふせってばかりでは気も沈むから、パリに出て遊んではどうなの

？」と。

産褥に負けそうになっていた時、サンソン先生のお宅に伺った時に見た、あのパリの裏町が忘れられず、わたくしは自然とパリに脚を運ぶことを避けていたのかも知れません。掃き溜めのような町の腐臭、ネズミの走る汚物だらけの石畳、セー又から湧き上がる汚濁の霧、人々の生気のない澱んだ目……。

わたくしにとってそれは、悪い夢を見ているかのような恐ろしい記憶としてどうしても心の中から離れてはくれないのです。

そんな澱みの中で輝いていたあの少年。

アンリは、今頃どうしているのかしら……。

わたくしの事などもうすっかり忘れてしまつて、同い年の女友達に恋などしているのかしら？

あれからまだ1年も経たないけど、子供というのは恐らくそのようなものですわね。

かくいう、わたくしだって久しぶりに会いに来てくださったアンリ・ブランシャル先生にお会いしたって、なんのときめきも感じませんでしたもの。あれだけ懸命に気を引こうとした方にだって時が経つてしまえば、本当に薄情になつてしまえるのが女性の長所でもあり、短所でもあるのですもの。

人の想いというのは、不思議なものですわね。

いつも何かに触れていなければ、何かに感じ入らなければたちまち凍えてしまうようで……

まるで小さなひな鳥のようです。

そんな甘えた感情は夫には託せません。

それは貴婦人としての望ましい態度ではないのですから。

愛は常に恋人に、尊敬は常に夫に、信頼は常に「わたくし」自身に！！

それがわたくし達の正しい心の在り方なのです……。

そんな中で、ある時オーロールがお土産のすずらの籠と一緒にやって来るなり、言ったのです。

「塞ぎこんでいる貴女には申し訳ないけど、わたしは一足お先にヴェルサイユにあがらせて戴くわよ。」

今度の国王陛下主催の舞踏会で、ドルレアン公のお引き立てで伺候することになったの。勿論、お友達なら喜んでくれるわよね？」

オーロールの大勢いる遊び相手の中にはかなり有力な方がいらつしやると、お母様がおつしやっていたのは知っていましたが、まさかそれが国王陛下のお従兄弟様だったなんて。

確かに彼女の美貌はパーティの華になり得るものでしょう、ドルレアン公に数々の「お花」がいらつしやるのは周知の事実ですが、まさかわたくしのお友達がその「お花」の一人だったなんて！

喜ばしいのはもちろんなのですが、羨ましい、と思ったことも否定できない事実でした。

「オーロール、あなたもヴェルサイユにあがるのは夢だったものね。先を越されたのは仕方ありませんけど……本当におめでとう。あなたなら宮廷でも素晴らしく振舞えると判っているわ。ヴェルサイユでのお話を聞くのを楽しみにしているから、ぜひ聞かせてちょうだいね。」

オーロールはその激しく輝く瞳をまっすぐにこちらに向けると、

「一年以内にヴェルサイユ宮にお部屋をいただくのが、今の一番の目標なの。そのためだったら、わたし、何だってしてよ。本物の貴族なんて、ただのお人形さんばかり。わたしには夢をかなえるだけの能力があるわ。楽しみにしていて。」

オーロールなら本当に、夢は自分で叶えるでしょう。

わたくし達の友情がここで終わるわけではありませんが、やはり寂しいものです。

「オーロール、なにかお祝いをしなくてはね。」

今の貴女には大したものではないかも知れないけれど、レースか、香水か、ボンボニエール・・・

何か欲しかった物はないかしら？」

「アレクサンドリーヌから戴く物なら何でもよくってよ。」

そうね、ウビガンの香水がいいわ！それをいただけるかしら？夜のオペラ座の雰囲気合った、ウビガンの香水をお願いするわ。」

ジャン・フランソワ・ウビガンが5年前に開いた香水店はパリのサントノレにありました。

華やかなこの通りには今やファッション大臣の名で通るローズ・ベルタンの店もあり、すぐそばにはドルレアン公のお住まい、パレ・ロワイヤルもあります。

ウビガンの香水は貴婦人ならば必ず一つは持っていたので、今さらオーロールが本当に欲しがっているなどとは思ってはいませんでした。だが、ありきたりな賛辞よりもやはりオーロールの心を潤わせるの

は宝石やドレス、綺麗な小物が必要でしょう。

わたくしは気が進まないながらもお付き合いの精神は捨て去ることは出来ませんでしたので（貴婦人としての使命でもありますので）
シャンタルを伴い、パリのお店に赴きました。

小綺麗なガラス戸を開くと、大きな香水瓶がいくつも並ぶマホガニーの棚を店内の中央奥に据え、壁伝いに整然と並べられた様々な装飾を施した香水入れが美しく煌いています。すでに数人の先客を相手に店主や売り子がビンからビンに香水を移し変えたり、美しい香水瓶とともに贈り物用として包装紙を貼り、レースを巻き、リボンで結び可愛らしく仕立てていました。

奥に通されて店主と他愛の無い流行の香りなどの話をしながらオーロールのプレゼントを調香していただいていると、ふと、隣の客席にいた殿方がこちらに視線を投じている事に気がつきました。

わたくしはその淡い金色の縦ロールの髪に透けるような白い肌を見た時、フラスコ画のマリア様のような印象を持ちました。その方の眼はあくまで穏やかな光を帯び、アンバーの瞳の奥には深く青い泉が沈んでおりました。お互いに軽く会釈をかわし、店主ともども3人でお話に興じた時にはじめて、その方のロレンツォ・バティステイーニと言うお名前を聞き、初めて男性だと言うことに気づいたのです。

「申し訳ございません、ムシユウ。わたくしつたら貴方のような素晴らしい機知に富むお話をしてくださる殿方を、すっかり女性だと思っておりますわ。」

それにしても貴方のお声はなんて軽やかに響くのでしょうか！
このような天使のような声でお話される殿方はきつとパリ中、いいえ、フランス中探してもいらっしやらないでしょうね。」

それを聞きながら、ロレンツォは微かに微笑むと仰々しくわたくしにお辞儀をしながら、自身を誉めそやすわたくしを遮るように言いました。

「わたしはカストラートを生業とさせていただく者でございます、マダム。

わたしは当年22になりますが、わたしの声は10歳のころで成長を止めました。

いいえ、どうかわたしめに同情なぞされませぬよう！

わたしはこの職業がとても気に入っているのですからね。

わたしはこの声さえ持っていれば、天上を渡る風にも春を告げる小鳥、楽園の花々のささやきにだってなれるのですから。」

カストラートは男性歌手です。

その澄み切った声は、少年期に去勢することで永遠の若さを与えられるものなのです。

ですから彼らは男性でありながらも、男性ではありません。

水晶のような声と引き換えに、男性としての努めは果たせなくなるのです。

故に外見もとても中性的になるのです。

まるで唄うようにそう言うロレンツォの紅潮した白い頬には、確かに一部の迷いなども感じられません。

明るく話しを盛り上げ、職業上で欧州を渡り歩いてきた彼の体験談は面白く時には熱を帯び音楽を語る時の飾り気の無い情熱をわたくしは好ましく思い、彼もまたわたくしの心根を何故かお気に召されたようでした。

なんら厭味のない人懐こいロレンツォとは、その時から心休まる友

人としてお付き合いが始まるのです。

美しいわたくしの新しいお友達は、オーロールのヴェルサイユ伺候をお祝いする音楽界にも快く出演してください、大いにわたくしの株をも上げてくれました。

最も彼の方も、わたくし以外の貴婦人や貴族のお目にとまり、大勢のパトロンに恵まれたのですからその辺りは「持ちつ持たれつ」でしょうね。

このように、古い友人は離れてもまた新しい出会いがあるものなのです。

ロレンツォの明るさと才能のお陰で、わたくしはまたパリに出かけ彼のオペラに通ったり、サロンを開き音楽界を主催し、とお決まりながらも忙しい「貴族の日常」に帰ってゆきました。

7、

「カフェ・ドウ・プロコップで少しお休みしませんか？

あそこは文人や役者、音楽家の巣窟みたいなところなので、花のようなマダムには少々、

むさ苦しい店かも知れませんが。」

そんな風に言いながら、ロレンツォは鈴のようにコロコロと軽やかに笑います。

お天気の午後には侍女のシャンタルやレティシアも伴い、ロレンツォを連れてお散歩をしました。

お散歩に出られない日はわたくしのハープやクラヴィコードのレッスンを眺めたり、体裁のよいお手紙の書き方を指南してくださったり、役者仲間のおふざけやお酒の上の失敗話と言った市井の冗談話などで愉しませてくれたのでした。

そこには男女の狂おしい愛情ではなく、まるで兄妹のような微笑ましくも暖かい安らぎがありました。

ロレンツォ自身は、

「その気になれば、そう例えば明日のパンやワインに少々困るようであれば・・・

貴婦人の寝台に上ること、そしてその方を満足してさしあげる事は不可能ではありませんよ。

でもわたしがマダム・サンドリヨン（シンデレラの意味。平民出身

のわたくしをあてこすった彼独特の言い方です。ですが、厭味ではなく親愛の表れでした。＼の寝台にのぼることは恐らくありません。そんな事をしなくとも、我々の友情は常に存在し続けると確信できるからです。」

などと嘯きました。

そんな風に、春の日差しのように快い関係でロレンツォに甘えることが出来た事が、この時期のわたくしにとって大変大きな幸せでした。

この頃から、数人の殿方がわたくしのブドワールに出入りをするようになりましたが、それは別段心を燃やす相手だった訳ではなく、ほんの気まぐれにお呼びただけだとか、たまたまロレンツォが公演中で時間が余っていて退屈しのぎだったから、などという他愛も無い理由だったように思います。ほとんどが顔はおろか、名前すら覚えていない方達なのですもの。

夫は特にそういった貴族のたしなみを並外れて好む、という方ではありませんでしたが、やはり数名の街娘や貴婦人をお相手なさっていらしたそうです。

とは言え、お互いの恋愛に口をはさむことなど、はしたない事です。わたくし達はそういう意味では立派な貴族の夫婦を形作っていたように感じます。

オーロールからは時々お手紙が着ます。

アントワネット様にはとうとう待望の王子様、ルイ・シャルル王太子殿下がお生まれになったので、宮廷はそれこそ毎日がパーティーだそうです。

毎晩毎晩、王妃様のお取り巻きの貴族たちがワイン樽を空け、お食事もお皿も山のように積みながら踊り明かすのだそうです。

国王陛下の妹君は遊びにいらしたパリで見た蠟人形館の精巧さに感動されたので、製作者のマリー・グロシュルツ（後のマダム・タッソーと言えばお分かりになるかしら。）をご自身の人形制作指導者としてヴェルサイユに住まわせていらつしやるだとか。

そして最近、やたらとあのフランシーヌ・ド・モンテクレール伯夫人（オーロールと若い役者を取り合った高慢な貴婦人です）が伺候してきては王妃様にお取次ぎのお願いをするため、ポリニャック伯爵夫人にいろいろな贈り物^{プレザン}をしている・・・云々。

オーロールには不愉快かも知れませんが、フランシーヌも嫁ぎ先の名誉回復のために必死なのはわたくしも存じておりました。

フランシーヌの義父と叔父は、先代のルイ15世に対する（と言うよりもその愛妾であったポンパドゥール伯夫人に対する）失態により、ヴェルサイユから追放された身分の方々でした。フランシーヌ自身が裕福な貴族の出であったとはいえ、ヴェルサイユの宮廷に上がれないなどは当時の貴族には耐え難い屈辱だったでしょう。ましてや貴族の体面を保とうとするならば、それは莫大なお金が不可欠になります。

きらびやかなドレスや高価な宝石、サロンを開き音楽会を催し、夜の舞踏会、オペラやお芝居鑑賞にカジノでの享楽、若い恋人の生活の面倒を見る・・・旅行に美食、食器や家具の収集、見栄は張りすぎて恥ずかしいことはないのです。

お金の苦勞から抜け出す唯一の手段が、宮廷人になることなのです。外側は絹のドレスや満面の微笑で飾る貴族も、心の中では真つ黒な野心の固まりで、宮廷は毎日のように新しい寵臣が生まれ、またそれと同時に去らなければいけない者も同じ数だけいたのです。

油断と怠慢は身を滅ぼし、欺瞞と虚飾、怨恨とが激しく混ざり合う世界なのだわたくしはこの時はまだ知るよしもありません。

オーロールの手紙に喜びながらも、わたくしも内心は焦っていたのかも知れません。

いつか、わたくしにもヴェルサイユへあがる機会が訪れるのかしら・・・？

義父はヴェルサイユで官職を持つ身分でした。そのまま行けば、義父の退職後に夫がその後任に就けるかも知れません。

とはいえ、義父はまだまだ若い愛人と夜毎の秘め事に熱中できる健在ぶりで、なかなか夫の出番は来そうにありませんでした。

幼い日に夢見た宮廷は、何故か「貴族」という身分になったのにも関わらず、遠くなつていくような気さえしてきました。

モヤモヤとふさぎこむのは、それだけで身体に障ります。

わたくしはロレンツォの楽屋に遊びに行く途中で、ファルジョンの香水店に立ち寄り彼の好みの香りを調香していただくことにしました。ファルジョンはすでに宮廷御用達商人として成功していた調香師でした。

わたくし達よりも10は歳上だと思いますが、気の置けない誠実な方で、ロレンツォの紹介で以後親しくさせていただいたのです。青年盛りのころは恐らくとても沢山のご婦人をときめかせたことでしょう、穏やかで謙虚な物腰はどなたから也好かれておりました。

今日もまた微笑を口元に絶やさず、迎えてくださいました。

「マダム。今日もいいお顔の色をなさっておりますね。

わたくしの調合したバラとカモミールの美容液が効いておりますし、う？」

「ありがとう、いつものお世辞と思って聞いておきますわ。

先日は王妃様のための香水を分けていただいて、嬉しゅうございました。

勿論、どなたにもお話しはしていませんので……ご安心くださいませ。」

「マダムには王妃様にも劣らない美しさがあるので、香りも引き立つでしょう。

さあ、今ロレンツォの香水をお出しいたしますので……

おや。マダムは今日、水仙の香りがいたしますね？お部屋に飾られたのですか？」

確かに、今日は目覚める前にシャンタルが裏庭から黄水仙の花束を切ってきて、ブドワールに活けてくれたのです。

こんな風にファルジンは、通常気がつかない微量な香りも嗅ぎ分けるほど、優れた鼻の持ち主なのでした。例えばある時は、わたくの食べた桃のゼリーや、うっかりと路上で踏んでしまったゴミの種類を言い当てたりしました。この能力に驚かされるのはもう慣れっことになっておりましたが、香水を小瓶に入れ替えながらファルジンはなにか考えこむように、こう言うのでした。

「マダム。お気を悪くなさらないで聞いてくださいませ。

近いうちに、貴女さまのお側にいらっしゃる方が、お亡くなりになるでしょう。

いえ、貴女ご自身ではありません。

ただ、貴女のおそばから……ほんの少々ですが、死の花の香りをするのです。」

この言葉にことさら不安になった訳ではありません。

ただ、なにか不穏な雲の動く空のような、漠然とした不安を感じたのは確かです。

つとめて気にしないふりをして、

「嫌な方ね。そんなイジワルをおっしゃるなら、もう香水を買いには来れませんわよ。」

死の花なぞ、あるわけがないでしょうに。」

しかしファルジンは悪びれた様子もなく、

「死の花は身近に死を経験した者でなければ、その香りはわかりません。」

大丈夫です、あなたが失って損をされるような方ではありませんから……。」

ますますもって、不可解ですがその場は冗談だととらえて店をあとにしました。

それからすぐに、その言葉が現実となつてわたくしの前に現れた時、ファルジンは「魔法使い」だと確信してしまったほどでした。

店内の入り口で待っていたシャンタルは、わたくしが奥から出てくると隣にいた男性に対し、なにか不機嫌そうに向こうに追いやる仕事をしていました。物乞いでしょうか？

いいえ……。

それが物乞いなどではないことは、きちんと上着を着ていた事でも判りました。

ただ、明らかに貴族ではありません。かつらも仰々しいレース飾りも付いていませんから。

だけどわたくしには、それがひと目でパリの汚濁の中においても尚、美しく成長したあの懐かしいアドニスであると確認できたのです！

「まあ、アンリ！！あなたはあのアンリなの？！なんて素敵になったのでしょうか。」

先生はお元気でいらっしゃるのかしら？」

わたくしはこうして、15歳になったアンリ・サンソンに再会したのでした。

シャンタルは彼を追いやろうとしましたが、わたくしはそのままアンリをカフェへと伴いました。

ねえ、こういう出会いを「ロマンス」と言つてよいのかしら？

だってわたくしは22とは言え既に「既婚女性^{マダム}」で、彼はまだ15の少年なのに・・・

わたくし達はそれでもお互いに、愛の泉がそれぞれの心の奥に湧き上がっていたことを言葉にせずとも確信しあえたのでした。わたくしお気に入りの水はなだ色のブドワールに、アンリを招んだのはそれから間もなくの事でした。

シャンタルやレティシアにどんなに咎められようと、彼の出自を毒づかれても、わたくしにはもう他には何も考えられませんでした。アンリは、それはたくましく成長しながらもまだ少年のあどけなさが残る赤みを帯びた健康的な頬に明るい瞳、端正でいてどこかまだ幼い面立ちがともあの汚濁の中で生きている人間には思えません。とは言え、アンリの父親の在り難くない称号は、その重さゆえに彼

らに対し貴族なみの報酬は与えていたのだそうで、暮らし向きは悪くなくアンリも常に身なりはきちんとしていました。

アンリとの再会に今までの雲が無くなり、晴れ渡ってしまった心に歯止めがきこうなどとは思いません、いえ、歯止めをかけようなどとは思わなかったと言うべきでしょうね。

わたくしはやっと、心の通いあう愛というものを感ずることが出来たのです。

アンリの全てについて言葉を尽そうとしても、それはきつと空虚なものになってしまいます。

わたくしには「大切なアンリ」が二人いて、その一人は可愛い天使である息子、アンリ・ジョゼフ。もう一人がこのアンリ・サンソンです。

この世のすべてに変えてもいいと思うほどに夢中になってしまったわたくし自身の心の内を、どうして理解していただく事ができましょう。

ロマンティックな出会い方をした訳ではありません。

甘い言葉をかけて下さるのでも無ければ、ましてや伊達男でもありません。

わたくしよりも若い、いえ幼い子供ですが彼には野生の獣の美しさがありました。

恐らくわたくしなどよりも数々の忌まわしい光景を見てきたのでしよう。

その青灰の澄んだ瞳には物憂げな光が宿り、それが余計に少年を大人に見せていたのです。

はじめてわたくしのブドワールに連れてきた時に、彼はシャントルが下がってからこう切り出しました。

「すっかり好くなられたみたいで嬉しいです。それと・・・あの時

はわざわざ・・・

こんなに高価な懐中時計をありがとうございました。

ボク、嬉しくて・・・他人からプレゼントなんて初めてでしたから・・・。」

そう言っただけ彼は胸の内ポケットから、あのブレゲの金製時計を出しました。

「あの時からずっと持ち歩いているんです。だって・・・。」

そこまで言っただけアンリは少しだけ視線をずらし、座っていたソファから立ち上がると窓辺に向かってつぶやくように言いました。

「本当にまたお会いできるなんて。ボク、嬉しいんです。」

ほんのりと紅に染まる引き締まりかけた少年の頬に、わたくしと同じ感情が宿っていないなどどうして思えるでしょうか。次の言葉を待つまでもなく、わたくしははしたなくも彼をその背後から抱きつつ、まるで少女のように心を震わせながら自分自身に言い聞かせるように囁いてしまいました。

「ずっと、貴方のことを想っていました。もうわたくし、待たなくてもよろしいですね・・・？」

なにも不安ではありませんでした。

それが他人からは愚かに見えようと、趣味のよくない遊びにしか

思われなくても、

お互いの欲するものが重なり合い、美しく育み合えるのならわたしは躊躇することなどはひとつもなかったのです。

世界は、どこまでもわたくし達の上に作られた宝石箱のように色とりどりの光にあふれ、澱みを知らぬ風と水の調べに浮かぶ金のゴンドラに身をゆだねながら、二人は楽園の罪なき住人となり・・・月の夜は銀色にきらめく森の小道で、雨の午後には花の香で満たしたブドワールの蠟燭シャンデルの灯りの下で、ただひたすらに愛を求めあわずにはいられませんでした。

手練手管に長けた貴族の殿方にはないアンリの純粹さに、やがては侍女たち、館の人間も心を開いてくれ始めていました。

アンリに会う時には必ず手紙のやりとりや馬車の用意をしましたが、それを進んでやってくれたのはシャンタルでした。ノルマンディの小さな漁村から奉公に来て、レティシアと一緒に実家から付いてきてくれた彼女はほぼアンリと同年だったはずです。わたくし以外にアンリが初めて館の人間と親しくなったのは、彼女でした。もつとも、シャンタルには彼女なりの思惑がちゃんと別にあり、馬丁のシモンといい関係だったので、アンリをお迎えに行くのは口実作りにはお誂え向きだったようです。

己の野心の一欠けらもない少年の誠実なだけの愛情が、ロレンツォをはじめとする貴族仲間ではないわたくしの友人たちに受け入れてもらえる喜びは言いようありません。

ロレンツォに言わせると、

「マダムが何故、あの麗しきアドニースに心奪われたのか、お察しいたしますよ。」

まるであなた方お二人は、太陽と月のように正反対の位置にいながらお互いを静かに認め、分かち合っておられる。呼吸することが自

然の振る舞いであるように、惹かれあうもの達は意識などいたしません。対極にあるものこそが、実は一番近いものでもあるのですから。」

しかし、アンリにはすでに判っていたのでしょうか。

どんなに心を通じ合わせても、背中合わせのわたくし達にとって決して交わる事の出来ない壁が、いつ二人の前に立ちはだかつてきても可笑しくないことなど。

「アレクサンドリーヌ、あなたは何故ボクを愛してくださるのですか？」

その事がボクにはひどく苦しい時があるんです……。

それはボクがあなたよりも子供だからなのですか？

……つらいのです。幸せは時に苦しみになるなんて知らなかったのですから……。」

時々、アンリはこう嘆きました。

自分には過分な境遇だと思ったのでしょうか、それともこの愛の日々は背徳行為とでも教会の神父様に諭されているのでしょうか？

彼を子供扱いしたことなど一度もありませんが、確かに16になっただばかりのアンリにわたくしの相手は負担に感じることもあったのかも知れません。

チャコールの巻き毛を指先で遊びながら、熱い身体を引き寄せてわたくしは思いあぐねつつ言葉をつながなくてはなりませんでした。

「あなたが後悔しているなどとは思いたくないの。

もし、あなたがそういう風に自分を呪うなら、それはわたくしに向けるべきです。」

あなたにはなんら罪などありはしませんもの。

あなたを・・・穢れの無いあなたを愛してしまったわたくしにこそ罪があるのですから。

お願いだからわたくしの想いをつらいなどと思わないでちょうだい。

幸せが苦しいなんて・・・そんな哀しい事は言わないで。」

舞踏会やサロンに明け暮れる日々の中で、本当に大切と思えるのはアンリとの時間だけでした。

貴族に嫁ぎながら貴族に心から馴染むことができていないわたくしの清涼剤となってくれるアンリに、わたくしが甘えているだけなのでしょう。

ただ同じ空間で、彼の息吹を感じていれば幸せなのに・・・アンリにはわたくしの存在は荷が重過ぎたのでしょうか。

そんな幼い恋愛に心を揺らしていた矢先に、館の人間が支度部屋でなにやら騒ぐのを聞きとがめると原因は数枚のビラにあるのでした。小間使いのドミニクがパリのパレ・ロワイヤル内の商店街で拾ってきたビラには、あるうことが王室を批判する不埒な中傷が、ご丁寧にも挿絵つきで書かれております。

王妃様は日がな一日、眼が飛び出すようなお金をかけて作った別荘（プチ・トリアノン宮のことです。

実際は先代ルイ15世陛下がポンパドール伯夫人に贈るために建てたお屋敷です。夫人は完成以前に亡くなり、そのままデュ・バリー夫人が使ったそうです。）に閉じこもっては怪しい連中と賭博や情事に耽っている！！

フランス国民が飢饉と税金に苦しんでいるのを判りつつ、「食べ物

がないですって？パンが無いのでしたら、では何故、お菓子^{フリオッシュ}をいただかないのですか？」

などとトンチンカンな、いや冷酷非情な物言いをするオーストリアの牝才オカミ！！

大砲つきの軍艦が何隻も買えるほどのお金を、愛人（！）のポリニヤック夫人とその一族にばらまいている。高価なネックレスもドレスも馬車も、気に入らなければ一日も使わずにヴェルサイユの運河に投げ込んでいるから、運河にはダイヤや金銀の堰が出来てしまっ
た！！

なんという事なのか・・・。

こんな風にあからさまに王妃様に対する侮辱が、このパリにまかり通っていたなんて・・・！！

先程までは王子誕生を祝っていた国民が、いまや公然とフランス王妃を批難しているとは。

わたくしはつとめて平静さを保つと、皆に對しこう言つのがやつと
でした。

「このような下世話なつくり話に乗ってどうするのです。

あなた方のご主人は将来、ヴェルサイユでお仕事をされる方なので
すよ。

王家に対して忠誠を誓わなくてはならないお立場なのですから、よく
よく考えてお話しなさいな。

さあ、もうこんな不愉快なお話はさせないでちょうだいね。お仕事
に戻ってちょうだい。」

ブドワールに戻ると、アンリがその様子を察したようにこちらを見

据えていました。

そんな真剣な表情の彼を見たのは初めてでしたので、居をつかれたようにわたくしは言葉にならず曖昧に微笑んでみましたが、アンリは鋭い視線を向けて言いました。

「あなたは本当にあの王室に仕えていくつもりなのですか？

あの陰険で、傲慢で、そのくせ何一つ自分たちでは生み出さない連中のもとにかしずくのですか？！」

「・・・わたくしも貴方の言う、何一つ自分では生み出さない貴族なのです。」

「もともとはあなたも平民ル・ブールだったはずですよ！！」

「今のわたくしには平民ル・ティエールだったと言う過去はもはや汚点なのです！」

怒りにまかせ、アンリに返した言葉の重たさにわたくし自身が呆然としたのは言うまでもありません。

アンリは、静かに頭を下げると何も言わずに邸を後にしました。

それまでのわたくしの人生には、自分の望みに対しての嘘などありませんでした。

ブルジョアの家生まれ、なに不自由のない生活の中で自然と生まれた更なる上流階級への夢になんら疑問を抱いたことなどありません。

王族は王族としての誇りと権力が当然で、国民全ての太陽として君臨する・・・

そのために貴族は王家に仕え、平民は貴族を支え、国は繁栄をし・
・

それが間違っていると言うのなら、わたくしは一体何を信じてここまでやってきたのでしょうか・・・

貴族の子女からは軽んじられ、身だしなみに、言葉使いに気をつけ、人間関係に気を配るために必死で名鑑とそれぞれの貴族の相関を覚え、宮廷のエチケットを覚え・・・

そうすることが正しいのだと信じて、費やしてきた青春は一体、何だったのでしょうか。

アンリに宿る苦悩と怒りに、わたくしはもはや「見えない壁」の存在に気づかぬふりをしない訳にはいけないのでしょうか・・・。

そんな風に1782年が過ぎようとしていた矢先に、わたくしは身ごもっていたことに気づいたのです。

この子は恐らく、かわいい巻き毛に青灰の瞳を持っているはずでしょう。

アンリの子である事は確信できたのです。

「タンプルの大通りにクルティウスの蠟人形館が出来そうですね。気晴らしに覗きに行ってみてはいかがです？」

盗賊の洞窟なんて言う、なにやら恐ろしげな内容ですが話のタネにはなりましょう。」

つわりで臥せっていたわたくしに、ロレンツオがお見舞いがてらそんな話をしていますが、タンプルには脚を伸ばせません。そこはアンリの住む場所の目と鼻の先です。

あんな嫌な言い争いをして尚、彼の献身は変わることなく手紙をシャンタルに託^{たく}けてはスミレの花を添えてくれます。

最近サンソン先生の医師としてのお仕事のお手伝いが頻繁になり、なかなかブローニユには来られないけれども自分の気持ちが変わることなど永久に在り得ない、と綴^{つづ}ってくれました。

それに引き換え、わたくしはなんとも子供っぽい対応しか出来ませんでした。

手紙をしたためる事をせず、ただシャンタルに伝言を頼むだけ・・・明日はサロンです、明後日は舞踏会ですので会えませんが、来週はだれそれと遠乗りの予定です・・・

アンリの失望がひしひしと伝わるのを感じながらも、わたくしにはもはやどうする事も出来ません。

そうしている間にも、お腹は少しずつ目立ってきていました。

夫との間に少しの関係もなかった訳ではないので、「貴方の子です」という体裁だけは保てる、そうすれば堂々とこの子をアンリに会わ

せてあげることだって、いつの日かできるはず・・・

・・・アンリははまだ知らないのです。

この身体に彼の恵みを受けた命が、息づいていることを。

会いたい、会ってあの時の失態を詫びたい気持ちと、会えないのは既にアンリの中にいるわたくしは彼の憎悪する醜くも愚かしい、貴族の女という生き物なのではないかという疑心からか、わたくしは彼から逃げまわっていたのです。

毎朝、目覚めてからいただくドリ^{ショコラ・ショコ}ンク・チョコも、あの少年の輝く笑顔がなくては味わいなさ判りません。白椿の香りも、森をぬける風のささやきも、すべてが色を失った煤けた絵のようです。

あの言い争いのあった時から、わたくしは自分の生きる道がどんな意味をもち、どれだけの価値があるのか考えるようになりました。そしてアンリの心に沈む、深い闇も・・・

アンリの生まれた家では、その将来を選ぶことなど出来ません。^{ムッシュウ・ド・バリ}アンリは父親の引退と共に、いづれは「死刑執行人」の称号を引き継ぎ、その手を血に染めなくてはなりません。

それはあの美しい少年の望みではなく、一部の権力が決めた運命で抗おうとすればそれは自分自身の破滅になるのです。アンリにはなにもかも判っていて、それ故将来になんの希望などは見出していませんでした。そんな境遇に耐えなければならぬ事はあまりに理不尽だったでしょう、どんなに生活の保障はされても、自分の未来は人の首を切り落とすために存在するなんて・・・アンリは、彼の心の平安をどこに見出したらよいのでしょうか？

わたくしの胸のなかで、少年は目を閉じて言った事がありました。

「夢を見ます・・・

暗い暗い森の中を何者かに追いかけられ、うしろから大鉈で首を落とされるのです。」

ボクは、でもその時やっと恐怖から解放されるのです・・・。

その瞬間から、やっとボクは息が出来るのです。」

アンリに代わってあげられる事など出来ないにしても、彼の心の平安になることならばわたくしにも可能なはずです。

わたくしは今まで、どれだけアンリに心救われてきたのでしょうか。今からでも「貴族」の生活に終止符を打ち、夫と別れて愛しいアンリと一緒に過ごしていけないだろうか、と真剣に夢想するわたくしがありました。

この身分を捨て、自分で子供を育て、自分たちで働き・・・

そんなお芝居のような人生が、わたくしに果たして可能なのでしょうか・・・？

思いあぐねる毎日のなかで、一体何通の手紙をアンリにあててしたためては暖炉に投じてしまった事でしようか。

このまま何事もなかったように、少年を捨て貴婦人として一生を享樂の世界に委ねるか。

愛しい人と新しい世界に逃げ出し、生涯ただ一着のドレスで働きづめになるか。

ヴェルサイユの夢を強固に持って、貴族にふさわしい愛人をつくり足がかりにするか。

パリに戻り、アンリのそばにいて二人で蔑まれても、忌み嫌われても一生を共にするか。

考えても考えても、一番の方法などどこにも存在などしない事は初めからわかつてはいたのです。

この森の向こうに見える黄金のヴェルサイユを見つめながら、わたくしは色あせたスミレの押し花に唇にあて、今までを思い返してみました。

初めての失恋は家庭教師、燃え尽きもせずただ悲しみにくれたファルケンシュタイン伯は雲の上の方、でもアンリは・・・？

わたくしを呼ぶその声に胸が高鳴ったのは、夕暮れが雲を染め、夜の帳が降りてくるまでの間でした。

振り返った瞬間に、アンリがわたくしを両の腕で抱きしめてきたのでいまや眼には涙があふれそうでした。

すでにわたくしよりも頭一つ以上は大きくなったアンリに、すっかり身を預けてわたくしはただ安堵のため息とともに口吻を求めて泣き伏しました。

アンリは涙もため息も優しすぎる口吻と一緒に受け止めてくれました。

「何故、泣いているのですか？」

ボクは貴女に失礼でしたか・・・？

会ってくだらないのはボクが何かいけない事をしたのですか？」

「・・・いいえ、違うの。違うんです。

わたくしが悪いの。何も考えていなかったわたくしの責任なんです。貴方が何よりも大切なことは、わかりきった事だったのに……。」

こんなにも心締め付けられる人間に対し、わたくしは一体何を迷う必要があると言うの？

この人は一心にわたくしを愛してくれているのに、なにを迷う事があるの？！

「……アンリ。お願いです。
わたくしを、どうか……一緒に……。」

言いかけたわたくし達の背後で、レティシアが急を告げに割って入ってきたこの時が、二人の道を永遠に分かつものだと一体誰が知りえましようか？

レティシアは恭しく、わたくしに肩掛けをかけると言いました。

「ご主人様がお待ち申し上げておりますよ。
先程ヴェルサイユから急使がいらして、ド・ラカーユ伯が宮中にてお亡くなりになったそうです。」

青天の霹靂とは、この事です。

「……お義父様がお亡くなりになりに?!」

「ええ、ですからご主人様は先代の後継として、出納長官の補佐として近日中にヴェルサイユにお上がりになるのですよ。奥様、おめでとつございます!」

思わずアンリを振り返ると、彼もまた呆然と、だけでも落ち着いた眼差しでこちらを見てました。

咽喉まで出掛かった言葉の先も、まだこの空間のどこかに漂う気さえしているのに・・・！！

何故、それが今日なの？！

何故、ここまで決心できたのに、ヴェルサイユが向こうからやって来てしまったの！？

「奥様、お身体に障るといけませんから、さあ。

夜風にあたりすぎるのは、お腹のお子様にもよろしくありませんよ。早く中に入って、ご主人様に挨拶しなければ。」

「・・・子供？」

アンリの問いかけに、レティはいらいらと言い返します。

「そうよ！貴方ってば気づかなかったの？！こんなに身体を冷やしてはいけないのに・・・

もし何か問題が起きたら、貴方は責任をとれるの？

サンソン先生だって、無理なことは無理なのよ！

さあ、もうお帰りなさいな。アンタもボヤボヤしていると辻強盗にやられるわよ！！」

ちつぽけな決心は、跡形も無く消え去り、冷たい夜風が耳元で鳴くのを聞きながら、

アンリの蒼白になった顔にはまともに視線を向けられず、震える声を抑えながら、努めて明るさを失わずにわたくしは言いました。

「今日はありがとう、アンリ。」

わたくしはこれからヴェルサイユに伺候するための準備がありますから、これで失礼いたしますわ。

お手紙をかきますね。

・・・だから貴方も、わたくしにお手紙を送ってちょうだいね。きつと・・・ね？

だってわたくし達の友情がここで終わるなんて、在り得ませんもの・・・」

立ちすくむアンリに背を向け、わたくしとレティは邸に向かって歩き出しました。

もう、振り向けません。

振り返って彼に、連れて行って欲しいとは、もう二度と言えないのです。

いえ、振り返ってはいけないのです。

もうそろそろ、自覚しなくてはなりません。

わたくしを待っているのは、パリの下町に暮らす生活ではないことを。

この邸の、わたくしのブドワールから臨むことが出来るあの黄金の宮殿にのぼる日を夢見てきたことを。

だけど。

胸がつぶされそうになるのは哀しいからではありません。

ヴェルサイユにのぼる、ただその実現が出来る喜びに耐えられないだけ……

アンリを手放す自分を哀れんでいるわけでは、ありません。

ただ、それだけなのに、涙が勝手に、止め処なくあふれきては枯れてくれないだけなのです……！！

こんな風にお別れしなければいけないのは、どうして……？

こんなにも激しく想い合い、求め合ったのに、もう二度と会えないなんて……！

では何故、出会ったの？

どうして出会わなければならなかったの？！

わたくし達の心に湧いた愛の泉の分だけ、一気に流れてしまえばいいのに……！！

絶対に、もう恋愛の苦しみで涙を見せたりはできませんもの。

何故なら、それが宮廷における貴婦人の礼儀だから！

これからわたくしは、宮廷にのぼらなくてはいけないのだから……。

もう絶対に、愛しい人など出来ません……

自分の心を殿方に乱されるなど、今後一切ありえません。

わかりきった事です。

恋愛は人生の甘美なお酒にしか過ぎません。
振り回されて人生を棒に振るなんて、恥ずべき行為だと言うつことくらい。

だから、もう、
泣く必要もないのですから・・・。

わたくしにはもう、ヴェルサイユしかないのですから。

夫の官職就任に伴い、ヴェルサイユに伺候してきたわたくしを待っていたのは、なんとも言えず冷たい視線の渦でした。

夫の父親であるド・ラカーユ伯はヴェルサイユに与えられていた一室で、若い愛人と戯言の最中に、心不全であっけなく世を去り、宮廷人達の哀れみと同時に嘲笑をも買っており、どうやら波乱の幕開けと言った様子です。

伺候の日に王妃様への謁見は急遽中止と聞かされた事は、お言葉をいただけたと思うたわたくし共にはいささかの動揺でした。

何故なら、この日謁見の間に赴く際にまず初めに国王陛下の侍従付き次官に仕えていらっしゃるお取次ぎ職の方から、

「本日陛下は狩りにお出でになられております故、謁見は後日改めて・・・」

そして王妃様の女官からは、

「王妃様は現在、お着替えの儀に入られ・・・」

「王妃様は現在、エスタハージ伯との昼食会にお出でになられ・・・」

「
拳句には

「王妃様は現在、離宮にて音楽会のご準備にお忙しくされ・・・」

とうとうこの日、わたくし達は謁見がかなわず終いだった、という事です。

一体、国王陛下や王后陛下は官職につく役人貴族をどうお考えにな

つておられるのでしょうか・・・

官職につく者にお目通りをする時間より、狩りや音楽会の準備の方が大切だという事なのでしょうか？

そんな風に煮え切らない思いを抱えながら、再度（本当は再々度でした・・・）の伺候に宮廷に赴いた時です。回廊の影から、身なりの立派な紳士がこちらに向かつて微笑んでいます。

宮中では、身分の差により会話が成立いたします。また、ご紹介されていない殿方にこちらから親しく話しかける事も出来ないのです。そのまま通り過ぎようとしたわたくしに、かの紳士は呼び止めてきたのでした。

「お若いマダム、何をそう急いでいらっしゃいますか？

そのように早足に行って、その先には何が待っておられるのです？」

紳士は40歳ほどの方でしょうか、しかしとてもお若く感じられる生き生きとした目つきにしっかりとした口調には知性を感じられます。身なりが立派、と感じたのは驚くことに上着の袖口飾りやボタンがまばゆいダイヤモンドだったからです。こんなきらびやかな方は、もしかすると国王陛下・・・？

「これは失礼しました。

わたくしはサン・ジェルマン伯爵と言う大嘘つきの山師でございます。

こちらの宮廷も先代に比べ、華やかさを失いつつあり寂しいものです。今しがた王妃様にも進言させていただいたのですが、船の舵取りは少しでも間違ってしまうと、うっかり大きな渦潮に巻き込まれてしまうと言うのに・・・

どうやら今のフランス王室の方々にはフランス語が通じないらしい。

花のようなマダムにはわたくしの言葉が、おわかりいただけている様子ですがね。」

その語り口に何か不思議な可笑しさを感じ、ついわたくしも冗談にのるように気軽に返事を返しました。

「伯爵さまの様にご自分で嘘つきの山師だなんてことおっしゃる方は大抵、好いお方であつたりするものですわ。

あなた様のフランス語は完璧ですわよ。

外国のお方、フランス王室のご心配をして下さるなんて有難う存じます。

ですがこの国の太陽が沈む事など、わたくしには到底考えられませんわ。」

わたくしがそう言うと、サン・ジェルマン伯爵は口元だけで微笑みながら回廊の窓越しに庭園に眼を向けて、ほんの少しだけ声の大きさを落として言ったのです。

「わたくしの事を少しでも信じていただけるならば、どうぞお願い致します。

1790年になる以前には、かならずこのヴェルサイユを離れてくださいますよう、切にお願い申し上げます。

あなた方の太陽が、すでに夕暮れにむかつて色褪せ始めていることはもはや隠し様もない事実でございますからね。

お若いマダム、あなたにはきつとわたくしの話が伝わるよう信じております……。」

はた、と気が付くと回廊には既に人影一つなく、あとに残された紳

士の軽い残り香がふうわりと鼻先をかすめていきました。

後に、サン・ジェルマン伯爵の数々の伝説をお聞きするまで、わたくしは白昼夢でも見たのかと思っていたのです。

無の状態からダイアモンドを作り出し、あらゆる言語をあやつり、時間と空間の壁をやぶり、見た事も聞いた事もない技術を駆使して世界中を飛び回る不老不死のサン・ジェルマン伯爵。

今思い返しても、彼が果たして本当のところ何者だったのか、判りません。

不思議なサン・ジェルマン伯との会話の直後に、わたくしはアントワネット様に謁見するはずのお部屋に向かったのですが・・・やはり今回も謁見は中止になったのです。

わたくしの他にもそれぞれ同じように謁見を待ち望む貴族の方々は朝早くから夕刻にせまる今まで、ずっと待っていたのです。これはあまりの仕打ちではないでしょうか？

女官の一人は、わたくしに言いました。

「マダム・ド・ラカーユ様、王妃様は大変お忙しいお方です故、またの機会にお目通りのお申し出をされますよう。では、御機嫌よう。」

「お待ちくださいませ。わたくしは今回もきちんと手順通りにお目通りのお約束をいたしました。」

何故、王妃様はお会いして下さらないのですか？

わたくしは王室にたいしての忠誠をお誓いするために、毎日・・・」

言いかけたその時に、女官室のドアを入ってきたのはあのオーロー

ルでした。

オーロールはしずしずとパステルグリーンのタフタのドレスを引き、わたくしの隣に立つとゆっくりお辞儀をしてから、

「マダム・アシオン様、大変失礼を致しました。

連れはまだ、宮廷の作法に不慣れでございます、どうかこの場はわたくしに免じてくださいませ。

後日、きちんとしたご挨拶を致します故、何卒謁見の方、御取り成しただけますようマダム・ド・ポリニャック様にはすでにお伝え申し上げます。

それではご機嫌よう。」

オーロールの出現にただあっけにとられていたわたくしは、彼女に引いていかれた支度部屋につくまで一言も口が聞けませんでした。支度部屋のドアを閉めると、オーロールはふっ、と息を抜いたように笑い、わたくしに向き直って言いました。

「女官長やポリニャック夫人になんの手土産もなく、あなたったら王妃様に謁見できるとでも思っていたの？ そんな事ではこのヴェルサイユでは生きていけないわよ！

さあ、もっとシャンと背筋を伸ばしなさい！！サーモンピンクのドレスが泣いていてよ？」

相変わらずのオーロールの氣勢につい気がゆるみ、ふふつと綻んだ刹那にわたくしの眼から大粒の涙がこぼれたのです。

「……そんな事で泣くものではないわ。

ここでは自分だけが頼りなのよ。あなたのご主人の官職なんて関係ないわ。

ただひたすら、王妃様とのお取り巻きに取り入って、這い上がる事だけしかないのよ……

泣いてはダメよ、アレクサンドリーヌ。

ただ泣く事しか出来ないのなら、パリにお帰りなさい！！

ここで生きていきたいのなら要領をつかんで、どんな小さなチャンスでも必ずモノにしていくのよ。

ここに来た以上は、もう貴女だってその道しかないことくらい、判っているでしょう……？

いいこと、アレクサンドリーヌ。わたしですら、明日はあなたの敵になるかも知れないのよ、
ヴェルサイユとは、そういう所なのよ……！」

本当に、オーロールの言う通りでした。

考えてみればわたくしには、もうそれしか残されてはいなかった事を……

あの森の中で、愛しい人の手を離れたその時から、わたくしにはもうヴェルサイユでの暮らししか、残された道はなかったのですから。そう誓ったのは、自分自身なのです。

本当に欲しかったただ一つの心を失った今、わたくしにはなにを躊躇することなどありませんよう？

ひたすらにこの宮殿にあがり、華やかな世界を夢見て今日まで貴婦人としての努力を重ねたのですから、あとの人生でも不可能なことではないはずです。

王妃様に近づくために、その前に崖のような困難がそそりたつならば登りましようとも。

宮廷に認められるために、いばらの道が続くなら棘も恐れず進んでみせましよう。

引き返す事など、もはやありませんもの。

「今はね、王妃様がお忙しいのは無理ないのよ。

アメリカの遠征からお氣に入りのフェルセン伯が戻ってこられてからね。

毎日が、プチ・トリアノンでの慰労会なの。

あなたがお氣に召さない訳ではないのよ。フェルセン伯の前ではね、あのポリニャック夫人ですら、王妃様に口を挟めないのだから。

夫人と女官たちには賄賂を渡してあるから、おそらく来月あたりには謁見できるはずよ。

とにかく、ヴェルサイユへようこそ。」

この庭園の向こうにある小さな別荘に王妃様がいらっしゃるのにも関わらず、お会いできない事がとても不可解でした。

政治をなさる訳でもなく、お着替えの肌着すらご自分一人ではされないお方にとって、わたくしのような人間一人にお会いくださる時間すらないのは、果たして何故なのでしょう？

その時、ふと頭によぎった不吉な妄想は、自分でも耐え難いもので

した。

以前、小間使いたちが拾ってきていた王妃様の中傷ビラ……。贅沢におぼれ、愛欲にふける自堕落な娼婦のような王妃様を模しいやらしい挿絵……

もしかするとわたくしは、何かとんでもない場所に迷い込んできてはいないだろうか……？

「オーロール、あなたは今どういう立場にいるの？」

あなたは王妃様や国王陛下にお会いしたことはあるの？」

「わたしはドルレアン公のお引き立てでこちらにいるのよ。今、女官の侍女なの。」

もうすぐこの宮殿内にお部屋もいただくはずよ。

最も、この支度部屋に毛が生えたような所だけれどね。」

パリの社交界においても輝いていた彼女はやはり、宮廷においても着実に足元を固めながら自分の進む道を歩んでいました。

引きかえ、わたくしは宮廷人の力関係に疎い、と言うことから始まり裏の社交術すら心得てはいませんでした。謁見にも段階を踏まなくては、頂上には永遠にたどりつかないようです。

あのお取次ぎの女官からしてみたらわたくしの申し出は、

明らかに、「礼儀知らずで」粗野な下町女のたわ言に過ぎなかったのです。

夕映えの大運河を背にしながら宮殿を出てくると、森につづくネプチューンの泉の奥から一台の馬車がゆっくりと入ってきました。

頭を下げ、深くお辞儀をしてから馬車のなかに眼をうつすと、そこには美しいシャンパン色のドレスに身を包んだ女性がおりました。

ふちの広い白いレースと羽飾りの帽子が淡い髪の色によく合っております。その方が王妃様だと判ったのは、お取り巻きのポリニヤツク伯夫人が向かいの座席に座っていたからです。軽やかに談笑されているご様子にはあの中傷ビラのような不謹慎な態度は見受けられません。

しかし、やはりこのヴェルサイユで受けた洗礼にわたくしは失望に近い想いを抱いてしまったのは確かでした。

憧れていた王室の態度はあまりに冷たく、宮廷内の人間は私利私欲に追われ、美しい王妃様には近づきたくてもお傍にすらいけない・

謁見の間にはあれだけ大勢、伺候されてくる貴族がお目通りを希望しているにも関わらず……。

そんな風にして、ようやくお目通りになった時にはわたくしの心はもはやすっかり冷めてしまっておりました。

国王陛下は「ああ、そうでしたね。では、余はこれにて……」と、まるで意に介すこともなく退出され王妃様もにこやかに振舞われましたが、

「申し訳ありませんけど、わたくしお友達とお芝居のお稽古がありますの。」

これからのご活躍をお祈りいたしますわ。それでは御機嫌よう。」

あまりのあつけ無さに、謁見の間を出てきたわたくしはしばらくは何事も考えられなかったのですが、

帰りがけの階段を降りるまでの間に、なにか釈然としない思いが生まれてきたのでした。

（太陽であるはずの国王陛下も……

王妃様もあまりにわたくし達のように忠誠心あふれる役人貴族に対して態度は軽すぎていらっしゃる。

こんな事はいままで王室と貴族の関係にはなかったはず……。

国王陛下には、王妃様にはわたくし達がどうでもいいとおっしゃるようなご様子……

こんな事は……おかしいのではないのかしら。）

ふと階段下を見ると、先日のサン・ジェルマン伯がてすりに腰掛けるようにしてこちらを見上げると、

こう言っただけです。

「ね、お若いマダム。やはり太陽は色褪せてきていますでしょう?」

11、

ヴェルサイユに伺候するようになってからしばらくして、女の子が生まれました。

かわいい金色の巻き毛、淡いヘーゼルと青の瞳、穏やかな顔つきの天使はエレーヌと名づけました。

アンリの子です。

夫は喜んでくれましたが、恐らく真実は判っていたのでしよう。

ただ、貴族としての体面上、実の娘として養育していく事に抵抗はなくむしろ上流社会の家同士のつながりを深める為に将来役立つ「人材」として、大変な難いプレゼントだと考えているであろうことは言うまでもありません。

彼の忘れ形見でもあるエレーヌがただ愛おしく、娘の将来のためにもヴェルサイユでの真の宮廷人にならなければ・・・

わたくしの日々はいよいよ忙しいものになるのです。

ヴェルサイユに伺候する日々で目にするものは相も変わらずのものです。

謁見の間につづく広間にはパリや地方から訪れた貴族の群れが、何時来るかも知れぬ機会にしびれをきらしながら一日中陛下や王妃様をお待ちしております。

優美な宮廷内には王室御用達の出入り商人の列が回廊を行き交い、

その列につづく侍女の団体がせわしなく荷物を運んでいく様は、まるで働きアリの行列でした。

手入れの行き届いた庭園は平民にも解放されておりましたが、一樣に身なりのよいブルジョアがほとんどでした。園内の茂みや運河のほとり、離宮につづき森の小陰で着飾った紳士や貴婦人が愛を交し合うのは日常出あう当たり前の光景です。で、わたくしは目のやり場に一苦勞しながら庭園内を横切っていかなければなりませんでした。

フランシーヌ・ド・モンテクレールに偶然会ったのは、庭園のオランジェリーをまっすぐに王妃様の樹木庭園に向かってお散歩しながら友人の女性を待っていましたところ、木陰に戯れる男女を見かけたので邪魔をしないように足早に通り過ぎようとした時でした。

見覚えのある口元のつけばくろに赤毛の縦ロール、高飛車な目つき……

フランシーヌが殿方に愛を確かめている最中を図らずも目撃してしまい、わたくしは一気に憂鬱になってしまいました。

きっと近いうちに山のような厭味を言われてしまうに違わないわ・

翌日、オーロールの支度部屋でお話をしていると、そこにフランシーヌが入ってきてうんざりする程にこやかに言いました。

「アレクサンドリーヌ、日参されていらっしゃるのね。感心いたしますわ。」

あなたのような真面目だけがご自分の長所だと信じている方が、この宮廷の良心となって下さることを大いに期待しておりますわ！」

……本当に相変わらざる余計な一言に、腹が立つどころか不覚

にも懐かしさすら覚えてしまい思わずクスリ、と微笑ってしまったのですが、それがどうやら彼女の癪にさわったようです。

「先日、庭園でわたくしの恋人に余計な色目を使ったことは大目に見てもよろしいけど、今後一切お互いの利害の一致がない限りは、どうぞお近づきにならないで下さいましね!!」

身に覚えの無い中傷です。彼女の恋人なぞ、実は顔どころか風体すら覚えていないのですから。

「フランシーヌ、わたくし誓って申し上げますが貴女のお友達に対して何ら特別な感情は抱いておりません。それどころかお顔やお名前すら存じ上げておりませんものを、一体どうやってその方の気を引こうなどと考えられるでしょうかしら？」

お望みどおり、わたくしは自ら貴女のお傍につこうなどとは一切考えておりませんので、どうか余計な気苦労などなさらぬようお願い申し上げますわ。」

オーロールは扇子で顔を隠すことなく笑い、フランシーヌは怒りに顔を火照らせながら勢いよく部屋を出て行きました。まるで通り雨のような方です。

「貴女にしては上出来だわ、アレクサンドリーヌ。」

フランシーヌはね、今若い恋人に夢中なのよ。そのル・ポルティエ伯なる若干20歳^{はたち}の若貴族様に入れあげ過ぎて、あの方は偉大なパトロンだったロアン卿を失ってしまったのよ。

浅はかにも程があるわ。

そういう訳でフランシーヌはとにかく王妃様にすがり付こうと必死なの。

ポリニャック夫人に渡した賄賂は一体どれだけの額になっているの

かしら。」

そんな話しはわたくしにとって本当に他人事ではなかったの、なにやら身につまされたのです。

考えてみれば、フランシーヌの方が自分の気持ちを貫いた部分では、人間らしいと言えましょう。

わたくしは宮廷人として生きる道と引き換えに、アンリを捨てたのですから……。

王妃様が離宮に続く森を買い取り、そこに自分の村里をお作りになるというお話しが、宮廷内で聞かれるようになりました。

ノルマンディの田舎家をモデルにした王妃様のための別荘は広大な森を残しつつ、人口の釣堀池をはり、そこに数百の鯉が放され牛や羊を飼うための酪農場や農家、粉引き小屋までもあり、池から森に流れる小さな小川には白鳥やカモ、あひるが浮かび粉引き農夫や糸紡ぎの女性までが雇い入れられたのです。少なくとも後年、わたくしが一度だけ訪れた「王妃の村里」^{アモ}は、おとぎ話を現実に作ってしまったような場所でした。

そうして天井知らずの予算で贅沢を愉しむ王室の生活の裏で、国民が凶作に嘆き、重税に苦しみながら中傷ビラに名指しされたお方をより一層、憎悪するようになっていったのです。

その頃わたくしは日毎夜毎の音楽会や舞踏会に参上しては顔を売り込み、大小は問わずに宮廷の様子を伺いました。懸命に宮廷人の相互関係を把握し、いっどこで巡ってくるか判らないながらも待っていた機会を最大限に活かす努力をしなければ……

国王陛下は舞踏会にはお付き合い程度しかお出でになりません。

王妃様はもちろん、いつだって主役でした。

大勢のお取り巻きを従え、軽やかに笑い、踊り最新のモードをお示しになるのです。

いっお声がかりがあってもいいように、王妃様のお気に召す態度、身なり、作法を心がけたものですが、「側近団」の強固な壁を崩せるなどあるうはずもなく、毎晩身も心も疲れ果てて館に戻るのです。

ある晩の宮廷舞踏会で、若い紳士がワルツのお相手にわたくしを所望して下さいました。

彼は一言で言う「ギャラントリー」です。

きちんとした身なりは言うまでもなく、美しくカールされたブロンズに趣味のよいフローラルの香り、品のある物腰に明朗な笑顔、甘い戯言、澱みないステップ・・・洗練されている完璧な紳士。

近衛士官であつたレオナルド・シュヴェルネの名は、ブドワールの寝台の上で伺いました。

とても情熱的な方で、すっかりその気にさせていただいたわたくしはお名前すら存じ上げない殿方をお部屋に招き入れるなどと言う少々やんちゃな事をしてしまいました、それを女性に後悔させない程の魅力が彼にはあります。

「貴女は何故か、とても寂しげな眼をしていますがそれが余計に愛しさを駆り立てます。

どうかわたしにだけは、その寂しさを打ち明けてくださいませんか・・・？

わたしは貴女が思うよりもずっと、そしてもっと以前から貴女に夢中なのですよ。」

レオナルドの話ではわたくし達はすでに謁見の間に控える部屋で

お会いしていたそうです。

わたくしがあの女官に何故王妃様にお会いできないのか、喰ってかかってしまった失態を演じた時に、

扉の陰にいらしてその一部始終を見守っていたそうです。かえって遠慮の無い物言いが、彼のような真から貴族の人間には新鮮に映ったのでしょうか。

「わたくしを町娘のように愛して、その後はどうなさるのかしら？ 寂しさと言うものは秘めているしかないから、寂しさと言うのですよ。

わたくしの気持ちも同じように愛してくださるのなら、わたくしの心を無理やりに開けてほしいなどは、もうおっしゃらないで下さいませね。」

彼は再びしとねに戻ると、わたくしに永遠の愛を誓いながら蠟燭の灯りが消えるまでお互いの身体の熱を分かち合ったのでした。

宮廷の噂の広がり方はとてもすばやく、わたくしはしばらくそのお話しの主人公でした。

レオナルと一緒に庭園をお散歩していただけで、すでに周囲は称美と嫉妬にうずまき視線でわたくし達に投げかけていました。

事実、オーロールに彼の事を話すと、とても驚いた顔をして

「まさか貴女がレオナル様を落とすなんて！！」

ああ、本当に貴女って勉強熱心なのね！そうやって自分の魅力をこの宮廷で存分に活かそうとする貴女はとても素敵よ。パリにいた可愛いだけの小娘とは違っていてよ。」

などと身に余る賛辞をわたくしにくれました。

レオナルドとの恋愛は、すべてが受身でいられた分、アンリの時とは違う開放感があつたように思います。わたくしと同一年の彼には奥様がいらつしゃいました。が子供はおりませんでした。奥様はベルギーからいらした方で、やはり当然の事ながら貴族らしい力関係を考慮されてのご結婚だそうです。

レオナルドの奥様は先代の国王陛下の子女であるヴィクトワール様の女官についてお世話をされていらつしゃるそうです。それぞれが貴族らしく生活している様は、わたくしなどには羨ましく感じられたものでした。

レオナルド自身は夜毎に花を贈ってくださるのは当たり前で、お芝居に、遠乗りにも、舞踏会にとわたくしを伴ってくださるのです。その頃はわたくしも女性の盛りで、レオナルドに磨かれていく自分自身に大いに満足しました。

ひとつの恋愛が今が盛りと咲き誇ると、不思議なものでその花の蜜を求めてやってくるその他の殿方も増えてきてわたくしのブドウは今や華やかな笑い声と美しい花束、素晴らしい贈り物の山の中で愛を営む、といった様相です。

わたくしの「社交家」っぷりには、夫も惜しめない賛辞をくれましたし、宮廷の貴婦人方にも（その大胆な貴族的放蕩生活が認められたのか？）徐々にお友達が増えていきました。最も、その大半はレオナルドを欲しての友情でありましたが。

そうして宮廷の中で、舞踏会に参加しても隅に置かれなくなってきた矢先の事でした。

わたくしはいつもの様に、レオナルドと共に宮廷の舞踏会に参りました。

楽しい会話と流れる音楽に包まれながら踊っていると、そこに王妃様が側近団を従えておなりになったのです。一同はすばやく列を成し、お辞儀をしながらお声がかかるのを待ちます。

レオナルとわたくしも王妃様がいらした時にお辞儀をしていますと、レオナルにお声をかけられたのです。

「レオナル、貴方が最近お仕事に精を出せないのは可愛いお方に夢中だからと伺いましたわ。それがこちらの方ね？」

レオナルは微笑みながら、

「左様でございます、王后陛下。こちらの御夫人はマダム・ド・ラカーユでございます。しかしながらわたくしは職務を軽んじているわけではございません事を、どうかお知りおき下さいますよう。」

王妃様はわたくしに目を向け、悠然と微笑まれるとゆつくりとわたくしに近づいてから

「ラカーユ夫人、ヴェルサイユを愉しまれる事をお祈りいたしますわ。」

来週の国王陛下主催のオペラにもぜひ、ご参加くださいませね。」

突然、お声がかかった事に一瞬とまどいながらも、わたくしは声を絞り出すように王妃様にお礼をいたしました。

「身に余るお言葉を頂戴いたしましたして、有難うございます。・・・王后陛下。」

ごきげんよう、と軽やかに大きなタフタと共に通り過ぎてゆく王妃様にはなんら緊張感はなく、まるで子供が花壇を荒らすように手当たり次第にお声をかけていかれる様を見て、わたくしはなんとも言

いがたい不可解さを覚えたのでした。

王室の頂点にあるお方が、なんの威圧感すらなく少女のようにおしやべりをしてダンスに興じる……

その気の抜き方は言いようの無い不安すら、感じられずにはおれません。

「王妃様にはもうなにも見えていらっしやらないのですわね。

恐らく、フェルセン伯とあの馬鹿げた村里^{アモ}の完成しか……

わたくしそろそろこの宮廷をお暇しようと思ひまして、ご挨拶をさせてもらいに伺ったのですよ。

レオナル、そしてお若いマダムも、どうかお幸せに。」

レオナルにそう言ってきた方は名門モンモランシー家の奥様でした。

王妃様は古い名家より新たなお取り巻きにだけ甘い権力を与え、すでに王室の品位は失われたというのが、この奥様をヴェルサイユに居づらくさせた理由でした。

レオナルは丁重に奥様を控えの間にお連れして、馬車が来るまで付き添っていて差し上げたのでした。

遠ざかるモンモランシー家の紋章つき馬車を見つめながら、レオナルはつぶやいたのです。

「貴族にこれだけ見放された王室は、これからどうすればいいのか・

・
もうそろそろ気づかれてもよろしいはずなのに。」

宮殿の舞踏会は、それでもいよいよ熱を帯びて香水と宝石の波にむ

せかえるのですた。

黒い肌のお小姓がオーロールに朝のシヨコラをうやうやしく差し出すのを見て、お友達のル・ビアン夫人は眉をひそめてあからさまに嫌な顔をなさいます。

このお小姓はアボドウと言う、アフリカ人の奴隷市で売られていた少年です。まだ15、6歳と言ったところでしょうか。大きな黒い眼はどこか小さな頃のアンリ・サンソンを思い出してしまえます。一体いつフランスに来たのかも、自分では一切語りませんし余計な事はなにひとつ話しません。

実際フランス語を話せるかどうかも怪しいのですが、オーロールはいたって呑気にこのお小姓にあらゆる場面で奉仕をさせています。

彼女が庭園の中のどこかに扇子を置き忘れてしまっても、きちんと翌朝には飾り箆^{コモド}笥の上に置かれていますし、誰某にいただいたルビのネックレスを探すように命じれば（実際、その手のネックレスは本人にだって見当が付かないはずです）数分後には化粧台の上に・

・
新調した靴^{ミヨール}を汚したくなければアボドウがその女主人の足元にハンカチーフを敷く、と言った具合でした。

「この子はわたしの黒い宝石なの。ドルレアン公にいただいた一番大きな贈り物かもね。

わたしもこの子無しでは宮廷にあがる支度は出来ないけど、アボドウもわたしがいなきゃ、生活は出来ないのよ。わたし達はとてもいい主従関係なの。」

そう笑って、オーロールはそのしなやかな指で少年の首筋をなぞると、アボドウは恥ずかしげに眼を伏せて俯きました。

「オーロール、まさか貴女はあのお小姓にそういう関係を強いているのではないでしょうね？」

わたくしがヴェルサイユの大運河まで連れ出して、オーロールに問い詰めたのは自分なりに「アンリへの自責の念」があつたからかも知れません。

オーロールは最初はとぼけてみせましたが、すぐに悪びれもせずに認めました。

「そうよ、アレクサンドリーヌのおっしやる通り、わたしはあの子と時々はそういう遊びもするの。」

子供ではないのだし、あの子はわたしのモノなのよ。何が悪いのかしら？

この貴族社会にはパリの家で教えられたような道德心なんて、邪魔なだけでしょ？

大体、あなたにだって年下の恋人がいたんじゃない？わたしが知らないとも思っていたの？」

「・・・わたしは自分の過ちがどれだけ深いものか判ってしまったから、貴女にも判って欲しいの。」

自分の欲望だけでまだ少年のアボドウを辱めてしまうのは、あなたの汚点にも成りかねないし、あの子の将来も潰してしまうのよ。

オーロール、人は決して誰一人として、あなたの道具ではないはずよ。」

オーロールにこんな正攻法ない方が通じるとは思えませんが、そ

の時に出来得るわたくしの説得は、その程度でしかありません。
オーロールはもはや呆れ顔です。

「奴隷を奴隷として使って何が悪いの？

あなたはわたしの生活が間違っていると言っの？

ご忠告はありがたくお受け取りしますけど、いちいちわたしの夜のお相手をあなたに報告する義務もなければ、あなたにはわたしの奴隷の将来を案ずる義務など無くてよ！」

王妃様に二人目の王子ある、ルイ・シャルル王太子殿下がお生まれになると、宮廷では公然の恋人としては是非を問わずに知られたフェルセン伯こそが、新たな王子の本当の父親なのではないかと噂されるようになっていたのです。

並み居る名門貴族の謁見をフイにしてフェルセン伯とお散歩なさったかと思えば、お取り巻きの中から勝手きままに大臣職を選んでしまふ、と言った放蕩ぶりに一人、二人、そしてまた一人と、今までこのヴェルサイユを彩られてきた王侯貴族の方々が落葉のごとく宮廷を自ら退かれていき、今ではヴェルサイユに空き部屋が増え始めたお陰で、わたくしのような者にさえ、マリー・テレーズ内親王妃殿下御付きの女官長付き侍女としてお部屋をいただけたのでした。

時折、ブローニュの館やパリで眼にするビラや中傷新聞には、そのころはもうだいたい慣れてはきましたが、相変わらずの王室（特に王妃様）の不人気ぶりはわたくしの気持ちを萎えさせました。

この頃から数年前に噴火した北国の火山灰や噴煙の影響で冷害になり、凶作つづきの荒地には実りが無く、食いつぶした農民は子供を

里子に出し、娘を売り、それでもパンにはありつけないという状態だったはずです。国民が不毛の生活に喘ぐ中で、ヴェルサイユだけは燦然と輝き、王族や貴族は楽園のような生活をしている・・・中でも憎むべきは王妃の放蕩ぶり。莫大な散財をしてヴェルサイユの森に自分だけの遊び場をつくっている！！そこでは王妃が農家のおかみの格好で、農家遊びを愉しむ予定・・・

急落する王妃様の人気に最後の一撃を加えたきっかけになったのは、わたくしの父の知り合いの宝石商であるベーマー氏がつくったダイヤモンドの首飾りでした。

一度だけ、ベーマー氏は先代ルイ15世から依頼されていた首飾りを持って余してお困りのようでした。

この首飾りは本来、デュ・バリール夫人に贈られるはずの物でしたが、陛下が急逝されたために、行き場がなくなりさりとて高価すぎるのではそんなじょそらの貴族には手が出ないので、望みをたくしたのがアントワネット様だったのです。

しかし、王妃様にはあまり面白くない代物だったらしく、ベーマーはすげなく追い返されてしまいました。

「ええ、もちろんとも見事な細工であることはわかります。ですけど、あの卑しい女性のために作られたネックレスなど、わたくし欲しくはありませんわ。」

困り果てたベーマーはやすやすと女詐欺師とその仲間につっかかり・

その後はみなさまの方が詳しいのでしょうね。

いろいろな形で大々的な記事になったのですもの。

結局、ダイヤモンドの首飾りはジャンヌ某の手中に入ってからバラバラにされ、売り払われ・・・

王妃様には何一つ、知らぬうちにご自分までが被害者、いえ、加害

者にもなっていたのです。

騙されたロアン卿は無罪、ジャンヌ某という女詐欺師は有罪になりました。

ご自分の名前を利用され、名誉を汚し王室の信頼を失墜させられたとして王妃様は裁判に訴えられたのですが、結果は無惨なものでした。

それどころか世論は王妃はジャンヌと共謀していて、ダイヤの首飾りをすでに手中に収めてしまったら今度はあの女を捨てて知らん顔してるのだ、という通説が行き渡ってしまったのです。

真相はどうであれ、今や王妃様の人気は地に堕ち、いかがわしい中傷ビラはパリの街にあふれ、王室のあり方に疑問を投げかけるアジ演説は至る所で繰り広げられているようです。

パリのカフェにロレンツォを久しぶりに訪ねた時の事です。

わたくしが二頭立ての馬車でセーヌ岸に着くと、そこに群がってきたのはまだ幼い少年や少女達でした。皆一様に両手を差し出し、馬丁やレティシアが追い払っても、またすぐに群がりだし、

「奥様、お願いです。銀貨一枚でいいから、恵んでください!」

「貴族の奥様、もう一週間もパンを食べていないんです!!」

「お願い、お腹が空いて死にそうです・・・パンを下さい!!」

わたくしは恐ろしくて馬車の中で一人、震えていました。

ロレンツォが機転をきかせて迎えに来てくれなければ、わたくしは恐怖で気が違ってしまったかも知れません。

「マダム・サンドリヨン、大丈夫ですか？！」

申し訳ありませんが、もはやこのパリは貴女にとっては故郷ではございません。

貴族の馬車でこちらに来るのは非常に危険かも知れないので、以降はわたしの方から伺うように致します。」

馬車の中で、ロレンツォは震えるわたくしとレティシアにかつてない程、真剣なまなざしを向けました。

「パリでは・・・、今、パリではそんなに食料がないのですか・・・？」

あの子供たちは、本当に食事をしていないのですか？」

「・・・残念ながらパリ市民の口に入るパンは、パン屋には置いてありません。

凶作で小麦も野菜も採れず、国民の口には何も入らないのです。」

この瞬間にも、宮廷では何千もの料理やお菓子、ワインが食べきれない程給仕されているのに。

パリでは今、この瞬間にも飢えて死に行く者があふれかえっているなんて・・・！

この国のすさまじき現状と国民の怒りと絶望が今、ようやく音を立ててわたくしの背後まで迫ってきていることに、気づかぬ訳にはいかないのです。

そうとは言え、あまりにわたくし達の世界は、ヴェルサイユはパリから遠すぎました。

ヴェルサイユに戻れば、そのような市民の苦しみを見る機会などありませんし、まったく別の世界が広がり、この世界はヴェルサイユ

だけしかないのではないか、と思つて暮らしていてもなんら差し障りのない空間なのです。閉ざされた世界と言うものは、その中に生きる人間に無上の喜びと平和を与えているかのように見え、その実、その中でしか生きてはいけないように骨をも蕩かす媚薬に漬け込まれてしまう恐ろしい冥府なのです……。

宮殿に戻ると、夕暮れの木立に戯れる紳士と貴婦人に声をかけられました。

「マダム。その先の樹木庭園にはお入りになる事は出来ませんよ。王妃様が上演されるお芝居用の飾りや資材でいっぱいですからね。」
すると貴婦人のほうがすかさず、こう付け加えたのです。

「あら、それはお名目でございましょう？
そちらには離れがたい外国の恋人同士がいらつしやるから、お邪魔をなさつてはいけないのでは？」

誰を揶揄しての表現なのかはいまや誰にでも判っていることです。
王妃様はオーストリア人、フェルセン伯はスウェーデン人ですので、外国人同士が宮廷において一番権力を持っていることに対しての憎悪がフランス貴族の方に蔓延しつつあるのです。
夕映えのヴァニラ色に染まる雲の覆う空に美しく映えるヴェルサイユに、もはや王妃様の権威など、そらぞらしい物になっているようです……。

お部屋に戻る途中、フランシーヌがどこかの殿方とわざとらしい歓喜の声をあげながら夕闇の中に消えてゆき、オーロールはアボドゥにワインを持ってこさせたようです。

お部屋の扉を閉めて、窓を開けると夕闇にひそむ何かにほんの少し

身震いしました。

この生活は、本当に自分にとって価値のあるものだったのでしょうか？
望んだ事とは言え、貴族の世界に飛び込んできた自分の判断は、本当に正しかったのでしょうか？

沈みかける太陽に、明日を託してしまってもよいのでしょうか・・・？

何かを考えなくてはならないのに、何も考え付かない自分にもどかしく、この宮殿の冷たいお部屋で一人、レオナールの来訪を待つしか今宵の慰めはないのでした。

「ママ王妃はどちらにいらしたのかしら？」

わたくしと最近ちつとも遊んでくださりません。少し前にママン・レーヌにドレスの見本人形をいただいてからはお会いしていませんわ。」

シュミーズドレスにお着替えしながら、マリー・テレーズ王女がそう言つと、お召し物係りの女官や侍女は、少し困つたような顔でお互いの顔を見合わせました。

王妃様が本日も謁見を中止にされ、プチ・トリアノン近くに完成した「村里」へお取り巻きの方々と早速お出かけあそばした事は皆すでに存じていたからです。

そうでなくても連日フェルセン伯とプチ・トリアノン宮でお過ごしになる事が多かったので、王女様にしてもお寂しい気持ちになった事でしょう。

王女様に限らず、折からの「感傷主義」も手伝つて、宮廷内ではあちらこちらで他人や自然に対する抒情的な心持を尊ぶことが流行っておりしました。

サロンの常連が数日姿をあらわさなければすぐに手紙をしたため、乳母に預けっ放しだった我が子に会えば、今までとは打って変わってキスの嵐を降らせ、

恋人が新しいパトロンに乗り換えると大声で泣き（信じられない醜態！！）、

「わたくしはこんなにもあなたを想っております事を、お忘れなく・
・・」

と、なかば押し付けがましくも己が心情を熱く表現する風潮が出てきたのです。

そんな直情的な表現ははしたないと信じてきたわたくしには、少々気恥ずかしさもあつたのですが、「流行」に遅れることはもつと恥ずかしいとも思っていたので、一度か二度で終わった殿方にもお手紙を綴り、レオナルドやロレンツォのお花や贈り物にも感嘆し、子供の手紙に涙しながら、王女様のお寂しい気持ちに共感する・・・と言つた具合でした。

ヴェルサイユでのそうした日々の中とは別に、わたくしの身近ではいろいろと人間の入替わりがありました。

母親が急逝し、乳母のところから8歳の長男、アンリ・ジョゼフが戻りました。結婚以来、ずっと実家から付き添ってきたくれた侍女のレティシアはパリのブルジョアと結婚、シャンタルも馬ていのドミニクと結婚し、田舎に戻っていきました。自分を補い続けてくれた人々が、そうして晩秋の葉が末枯れるようにわたくしのそばからいなくなつてゆくのはやはり淋しいものです・・・。

宮廷にいらしていた調香師・ファルジョンにお会いするのはパリの様子を聞く好い機会でした。

花の炊き方を記した覚書や香水の見本をお土産にいただき、イギリスから取り寄せた紅茶を片手にわたくしはふと、以前ファルジョンに指摘された「死の花の香り」についての出来事を思い出しました。

「ファルジョン、貴方は死の花の香りが判るのは身近な人間の死を体験した者だけと、わたくしにそう言つただけ・・・」

それはわたくしにも判るものなのかしら？

最近、お母様を亡くしたもので、何かふと以前貴方に言われた事を思い出したのですわ。」

ファルジヨンは薄い微笑みともつかない表情でやさしくわたくしを見て、考えるでもなく言いました。

「人間にも花のように、様々な香りがあります。

わたしが感じるのは、人々の生活や感情からにじみ出るものでの的確な表現ではあられませせん。

香水を作り始めてもう20年以上になりますが、わたし以外にそれを感じる事が出来たのは、父だけです。

何故、そういう風にとらえる事が出来るのかは、正直わたしにも判らないのです。」

見えないものを感じ、形ないものを捉えては香りを併せ、女神の吐息のような香水をつくるファルジヨンにとって死の花とはどのような香りだったのでしょうか。ついには聞きそびれてしまったことが、少しだけ悔やまれます……。

宮殿の端につくられた村里^{アモ}で農婦まがいのことをしながらも、トリアノンでは側近団と言われる一部の外国貴族や振興貴族としかお付き合いしようとなさらない王妃様に愛想を尽かした貴族達はすでに伺候も謁見もせず、いまやヴェルサイユはガラガラです。

数年前に起きた火山噴火のために、この欧州において冷害がつづき凶作にあえぐ農民たちは瀕死の状態でした。ロレンツォとおしゃべりの中にはかならず、

「今日はなんと6人のパリ娘たちが、春をひさぐためにと馬車の前におどり出てきましたよ。」

ですがそれらの娘はほとんどが11か12そこらの子供でしたので、銀貨を持たせて丁重にお断りしました。驚いたのは、何とその中に男の子が混ざっていたことです。

彼は父親に言われて女の格好をさせられ、身体を売っているのだそうです……。

マダム、わたしにはこの窮状が最近とみに恐ろしく思えてたまりません。」

といった話が出るのです。

恐ろしくも悲しい話です。

パンやスープのために、身体をひさがなければならない子供たちがいるなんて……。

明日の生活を心配しなければならぬ人生があるなんて!!

これを「感傷」ではなく、「博愛」の名のもとに把握しうる平民社会の中で真摯に受け止めることが出来たのであれば、その後のわたくしの流浪の生活ももっと違った姿勢で望めたのかもしれない。

この世の贅沢の全てはヴェルサイユに集中し、宮廷貴族は何一つ不自由など知らずに毎日の退屈を遊びに変える手立てにのみ暮らし……

一方の平民は毎日生き続ける、ただただで心使い果たしつつあった一枚の服に身をやつし……

人は全てが本当に平等ではないと言う事はわたくしの数少ない経験の中からでもわかるものです。

美しく生まれる者とそうでない者、

富める者と貧しい者、

高貴な者と……

いいえ。

いいえ！生まれついた立場に矛盾など唱えたら、では神は何ゆえわたくし達をこのような美しい国の美しき世界に誕生させ、そうでない者たちを傍に置きたもうたのでしょうか？

あるがままの生活を享受出来ないぞと・・・

それは神に反する行為でしょう？

わたくしのこの立場は、当然あるべきもので誰に恥じることなどないはずです・・・！

それなのに・・・

なぜ、こんなにも不安なのでしょう？

夫からは王室の財政は行き詰っていると聞きました。

太陽王ルイ14世からの対外戦争や先代の愛妾たちが我が物にしてきた莫大なお金、そして今、アントワネット様が散財し、贅沢にかける歯止めない遊びの数々に対し宮中からも「赤字夫人」と呼ばれているとは王妃様自身はご存知ありません。

ご自分の延臣を大臣に据え、国庫にお金がないといえば新たに税をとるよう勝手に命令を出しながら、自らは村里でお取り巻きと遊び暮らす毎日・・・

わたくしの夫はここ最近、このような王妃様の中傷を口にするようになってきました。

あまつさえ、そろそろヴェルサイユから退く所存だと聞かされたときには卒倒しそうになる程驚きました。いまの官職を捨て、田舎の領地に行くと言うのです。

わたくしはふと、幼い頃に育った修道院のカビ臭い台所を思い出し、寒気がしました。

「ムツシュウ、あなたがそこまで田舎暮らしにご興味がおありだとはわたくし今の今まで存じ上げませんでしたわ。確かにこの宮廷内には今とても不穏な雰囲気があるとは思いますが、

ですが、わたくしはパリで生まれ、このヴェルサイユに暮らすことを誇りに思っただけで、今日まで暮らしてきたのですよ。いきなりの田舎暮らしはわたくし、納得できません。」

そう、今までどのような努力をして貴婦人として生活をしてきたか、ここまでたどり着くのにどれほどの犠牲があったのか、この夫に判るはずもございません。

彼は生まれつきの貴族階級なのですから。

このコルセットとパニエの下に隠してきた炎のような欲望も身を裂かれたかのような別れも、この夫に判れと言う方が無理でしょう。

「マダム、おそらくどの解決策も国庫の赤字を埋めるのはもはや無理でしょう。

現在、高等法院が王室からの新税と借金の要求をめぐって争っているのです。

わたしたちはこの間に田舎で暮らしながら、次なる場所を探すべく準備を始めておくのが妥当かと思うのです。貴女や子供たちのためにも……

アンリ・ジョゼフやエレヌにもそろそろ外国を見せてあげるいい機会だと思えますが……。」

夫はヴェルサイユを離れ、はては外国に移ろうと計画をしていたのでした。

そこまでして離れなければいけない理由を、夫は夫なりの宮廷生活のなかでつかんでいたのかも知れません。

もうそこまで、フランス王室の危機が……貴族社会の終わりが近

づいていた事に、わたくしはまだ理解しようとは思っていなかったのです。

理解するには、あまりに平民社会と隔絶された世界に生きていた・
・生きていたかったのです。

夏がくる一番美しい季節に、夫は官職を退きまたブローニユの森にある館に戻りました。

内親王殿下の侍女としてのわたくしの立場は、王妃様のお情けで維持されわたくしはヴェルサイユに留まることが出来ましたが、わたくしの夫同様に、官職を退く紳士や貴婦人がこの時期重なっていたのも事実です。それでも宮殿の生活はゆったりと流れ、美しい恋人、音楽、舞踏会・・・・

1788年の秋、財政危機と新税、新たな国の借金をめぐり高等法院と王室は再び争い・・・・

そうして法院はついに「三部会」の要求を国王陛下に出したのです。国王陛下のお従兄弟であるドルレアン公のように王室に反目し、高等法院についた貴族たちのなんと多いことか・・・・！！

恐れ多くもわが夫も、この時すでに法院側についていた事がわかり、わたくしを驚愕させました。

この頃になるとドルレアン公はもはや隠すことなく自らの利権と地位の入れ替わりに意思表示を始めていたので、彼の側につくことはヴェルサイユにおいての立場も微妙なものになるのです。

夫はそれに左右されたくないが為に、官職を退いたのです。

それ以後、内親王陛下についていたただかせていたわたくしの立場にかなりの変化がみられたのです。

「アレクサンドリーヌ、あなたは確か内親王殿下の肌着係りでしたわね？」

歳の瀬にさしかかっていた12月。

珍しくフランシーヌが支度部屋にいるわたくしに声をかけてきました。

その手には薄紅のシルクで出来たシュミーズドレスを衣服用のカゴに入れ携えていました。

「このシルクは中国シノウでも一番よい地方のもので織らせてあるのですけど・・・」

わたくしの実家から送られてきたのでぜひともマリー・テレーズ様に献上したいと思ひましてね。」

繊細なレースと真珠のような光沢のシルクがとても美しい一品でした。

わたくしは贈り物なら女官長さまにお通ししてからの方がよろしいと告げると、フランシーヌは頭かぶりを振ります。

「つまりね、これはわたくしの地位をお願いするための物ですの。だってね、ホラ、貴女のようにあれよあれよと言う間に出世された方とは違って、わたくしなどは未だ伺候することしか許されていませんのよ。せめてお部屋のひとつもいただく身分になって一族に誇れる貴婦人になりたいのよ。わかつていただけるかしら？」

フランシーヌはたしかに、伺候は許される身分として宮廷に出入りしてはいましたが、王妃様とのつながりが薄く、ヴェルサイユに近

いお屋敷から日参する毎日です。もとは名のある貴族出身の彼女がわたくしのような平民出身の女性にさえ与えられているヴェルサイユの部屋を欲するのは何ら不思議なことではありません。わたくしは少しばかりの同情もあつてか、フランシーヌからの贈り物カゴと共に彼女の立場を考慮していただけるよう内親王付きの女官長さまにお願いしようと請け負いました。

午後のミサの前にお着替えをなさるので、それに間に合うようにカゴを持参して控えの間に入り内親王殿下を待ちながら、女官長付きの侍女のマダム・シャルボニエにカゴをお渡ししながら、

「こちらの素晴らしいシュミーズドレスはマダム・ド・モンテクレールからでございます。

ぜひ、殿下がお納めくださいますよう、にと仰せつかつて参りました……。」

シャルボニエ夫人はまず、このドレスの色を誉めたたえ、それを傷つけないよう手袋で広げながらマリー・テレーズ様のお着替え用のカゴにいそいそと運んでいたその時、夫人が悲痛な声をあげたのです。

「ああ……！　なんとということなの……！」

「いかなされましたか？！」

「マダム・シャルボニエの手から血が……」

シュミーズドレスの端に、小さな真紅の斑点が浮いてくると同時に、長針の光が眼に留まりました。

「こんな・・・このような危険なものをマリー・テレーズ様に・・・！！」

マダム・ド・ラカーユ！！これは一体どういうつもりなの！？」

「これは・・・これはマダム・フランシーヌからの・・・わたくしではありません！！断じて！！」

怒りにふるえたシャルボニエ夫人の手に、カゴからつまみ出されたカードにはこう書かれていたように記憶しております。

「内親王殿下へ 愛をこめて・・・ アレクサンドリーヌ・ド・ラカーユ」

騒然とする中、わたくしはただ呆然とことの成り行きを見守りつつ、血の気の引いた頭の中でただひとつ確信した事実のみに打ちのめされてしまい言葉が繋がずにいました。

・・・畏だつたのだ。始めから・・・。

フランシーヌがわたくしの現在の微妙な立場を徹底的に剥奪するために仕組まれた・・・

いえ、フランシーヌだけの企みではないでしょう。

恐らく、この中に共謀している人間が一人・・・いえ、何人もいるかも知れない・・・！！

ああ・・・！！この不穏な空気のなかに一筋流れる確信的なまでに強固な連帯感は何・・・？

内親王殿下以外の皆が、わたくしに冷たい視線で応じているなんて！！

女官の中には明らかに微笑まで浮かべている者すらいるのは・・・

何故？！

仕組まれたのだ・・・

わたくしは、とうとう反王党派という夫の罪に馬鹿げた小細工の上乗せまでされて！！

千の謝罪も万の懇願も、この絶対的な心理的暴力からは逃れられないことはもはや出来ないことを、王宮の近衛兵が近づいてきた時点で、わたくしは悟ったのでした。

近衛兵の荒々しい所業でしょうか？

それとも宮廷内には泥棒が巢食っているのでしょうか？

近衛士官に連行されるように部屋に戻ると、室内の荷物はバラバラになっておりました。

鏡台も書き物机も飾り筆筒も、すべての引き出しを開けられドレスは散らばり、宝石箱も開けられ、靴もショールも椅子さえも、すべてがあちこちに転がりまるで嵐にあったようでした。

「何故、このような仕打ちを受けねばならないのです・・・？」

わたくしは・・・今まで一度たりと国王陛下や王后陛下に対し背いたことなどありませんでしたのに。

なぜ、わたくしの・・・。」

涙にのどがつまり、声を殺して泣くのがやっとです。

近衛士官は冷静な顔つきで短い通達を、わたくしに放ったのです。

「王后陛下よりのご命令です。

今すぐにヴェルサイユからお立ち去りなさいますよう・・・。」

理由は、マダムがよくご存知であるかと思われます。」

大きな波がきて、身体のすべてを沖に引き込まれそうになるような絶望と敗北。

それなのに身体はのろのろと荷物をまとめ始めています。

わたくしが今まで贈られた水晶の小瓶のかけらをよけながら、ゴブランのクッションにつまずきながら、ドレスと宝石はなんとか無事を確認して馬車に積むようお願いしました。最後にレオナルドにお別れのお手紙を、と思いましたが丁重にお断りされたのでセールブルのティーカップのかけらを踏みしめながら、まさか自分がこのようなみずばらしい境遇になるうとは思わず、ひとり唇をかんたのでした。その時、ドアが開き入ってきたのはフランシーヌでした。

満足げな笑みをたたえ、足音も高くフランシーヌははずかずかと入ってきてため息をつきました。

「失礼ですけど、お早い退去をお願いしますわね。

わたくしここのお部屋をいただくことになっておりますのよ。

アントワネット様の御口聞きでね。」

続いて入ってきたのは、オーロールでした。

彼女自身、ドルレアン公の後ろ盾に守られていた宮廷生活でしたので、しばらくはパレ・ロワイヤルにいたはずです。そのオーロールが戻ってくるなんて・・・まさか・・・

「アレクサンドリーヌ。残念だけど、貴女の宮廷生活もここまでだわね。」

「オーロール・・・貴女は・・・」

「わたしはね、今はドルレアン公とはお別れして、ブリサク公やランベスク公のお傍にいるのよ。

反王党派ではこの宮廷で暮らせはしないでしょう？

わたしはやっぱリヴェルサイユの暮らしが好きなの。

という訳でもう貴女を助けることは出来ないのよ。アレクサンドリ
ー又、貴女はもうお帰りなさい。

所詮、貴女はここでの生活は無理だったという事なのよ。」

夕暮れの森を、馬車でゆられながらブローニユに着くまでの間、
わたくしの中にこれほどまで汚らしい感情があるなどとは今まで思
ってもみなかったの、われながら恐ろしくなつたのです。

呪われてしまえ！！

あの宮殿に巢食う卑しい貴族たちすべて！！

悪魔にも劣る下劣で貪欲に地位を欲する地獄の亡者たち！！

そして・・・呪われるがいい！！こんな世界を夢見た愚かなわたく
し・・・！！

森の向こうに沈みかけた夕日は涙ににじみ、この上なく美しい彩り
に思えました。

さようなら・・・美しい黄金のヴェルサイユ。

虚飾と軽薄さに生きた見せ掛けの王妃様。

欲にまみれた宮廷貴族たち。

なにもかもきらびやか過ぎる美しさにまぎれ、真実などありはしな
い宮殿。

さようなら・・・

わたくしの美しい恋人。

わたくしの小さな頃の夢・・・

もう二度とは戻れない、おとぎ話しの国・・・

ブローニュに着くと、なつかしい家人や知人が何事もなく迎えてくれ、わたくしは心のつかえが一気に取れたのでした。懐かしいわたくしのブドワールは女主人の不在にも凜とした姿のまま待っていてくれたので、一人夜も更けると誰ともなく泣けてきてしまいました。

わたくしはわたくしなりに頑張りました・・・

立ち居振る舞いも気の利いた会話も殿方への愛情の示し方も、何一つ他の貴婦人に比べてひけをとらなかつたはずです。そのことは決して卑下する事ではありません。ただ、わたくしに足りなかつたものは自分自身への配慮、その一つのみです。

これからはもう、自分自身だけを大切に出来る・・・

自分だけの言葉で、自分だけの心で何でも言えるのです。

どうしてそんな当たり前の事が幸せなのだと、今まで気づかなかつたのでしょうか。

静かな森でゆつくりと子供を育てながら、暮らせる・・・

帰ったばかりのわたくしはそんな生活がいつまでも続くと、本当に信じていたのです。

夫は足しげくドルレアン公のもとに通い、なにやら忙しそうに三部会の話に熱が入っている様子です。

1789年も明け、三部会招集の命が出されると、夫は自分の領地であるブルターニュ地方から貴族議員として立候補するようです。

三部会が開催されるともうなかなかパリに遊びに行けないと思い、わたくしはロレンツォを伴い実家に遊びに行きました。パリは華やぐ表通りとは裏腹な貧民街があちらこちらでうめき声をあげているかのような、重々しい街と化していました。

わたくしの両親は姉の嫁ぎ先であるドイツ国境に近い街に一時移るそうです。

なによりパリの街の雰囲気には異様な空気を含んでいるのは間違いないようです……。

実家からの帰り道、馬車の中でそれまでの他愛もないおしゃべりが一区切りするとロレンツォは期を見計らったかのように、わたくしに真剣な眼差しを向けて言ったのでした。

「マダム・サンドリヨン。 聡明な貴女ならそろそろ判っているはずです。

あなたのご両親の選択はまとも過ぎるほど最良の手段でしょう。

あなたも遠からず、ご家族とともに外国に行かれることを、わたくしはお薦めいたします。」

いきなりの進言にわたくしがおろおろと一言も返さないでいると、ロレンツォは口元だけをあげて無理やりに笑顔をつくりました。

「これは、アンリ・サンソンからの受け売りなんですけどね。」

頭のなかで福音のように、あの輝かしい名前が響きました。

わたくしのただひとつの清らかな魂は、まだ彼の中で息づいていたのでしょうか……？

まさかアンリが、こんなわたくしの身を案じてくれているなんて……

「・・・ロレンツォ。あなたはアンリと会っていらしたの？・・・
ずっと？」

「マダムを慮っているつもりこそあれ、裏切り行為だとはこれっぽ
っちも思っておりません。

アンリ・サンソンは現在、防衛軍に入っておりますよ。

パリの街は以外にせまくて、わたしがアンリと酒を飲む場で鉢合わ
せるなんて珍しいことではありませぬ故・・・。」

アンリが防衛軍に・・・

あの愛しいアドニスが、軍人に？

わたくしの心情を察するにはロレンツォはあまりに簡単すぎるとで
も言うように、御者に行き先をブローニュからパレ・ロワイヤル
近くに変更させました。

「会えるとは限りませんよ。わたしもたまたま都合のつく時間に会
っていたけなのですから。

神が御身に万にひとつの奇跡をもたらさん事をお祈りいたしますけ
ど。」

タバコの煙る薄暗い店内には、さまざまな身分の人間が入り混じっておりまして。

文学や音楽を語る若者たちがいれば、政治や経済、はては歴史上の偉業まで論じる貴族とおぼしき紳士を囲む平民とひと目でわかる若者達……

なかには男装する貴婦人を囲む若い愛人たちまでも、オペラの主題について花を咲かせております。

お酒のグラスのすれあう乾いた音、心地好い低音のざわめき……こんな空間がパリにあったのだと驚くわたくしの手を恭しく引くとロレンツォは店内奥の二階に通じる回廊を登っていきました。

二階は思っていたよりも蝋燭があかあかと灯り、いくつかのテーブルとソファに何人かが散りじりに座り、お互い言葉を交わすことなぐもの思いに耽る様にグラスを傾けているといった様子でした。

その人影のなかに懐かしくもいとおしい人を見つける事に思いがけず時間がかかったことには自分でも意外でした。

アンリは外出着にしては軽いコートをかけ、細く長くなった精悍な顔をこちらに向けるとロレンツォに向かって一瞬微笑んだのですが、すぐにわたくしを見つけ真顔にもどるとゆっくり立ち上がりました。ロレンツォの陰から彼を見やるわたくしの不安そうな面持ちに、アンリはふと、息を吐くと真っ直ぐにこちらに向かって来ました。

「ここには連れてきてはいけないと言ったはずだ。」

アンリはロレンツォに批難の目を向けるとそう切り出しました。

ああ・・・懐かしすぎるよく通る少しだけ低くなった声。背はいまだ伸びているかのように遅しく・・・

ロレンツォはニコリともせず、アンリの横をすり抜けるようにして奥のソファに陣取ると、悪びれもせずに言いました。

「離れ離れた恋人たちを引き合わせるなんて陳腐な趣向なぞ、もちろん引き受けたくはなかったけどね、マダム・サンドリヨンもこうして宮廷から出戻った訳だから、旧知の者が再び親交を暖めることはそう悪い考えでもなさそうだったから、そうしたまでですよ。仮に余計なお世話と言うならば、君はわたしとほぼ2年の間、ここで酒を酌み交わすなんて事はしなかったと思うのですけれど・・・いかがですか？」

アンリは黙ってうなだれ、紅く染まった頬には恥じらいと慎みがあふれています。

わたくしはもう一言も黙っていられず、とうとう声をかけてしまいました。

「・・・お元気そうね、アンリ。本当に・・・素晴らしい青年になって・・・。」

アンリは少しだけ微笑むと、真っ直ぐにこちらに身体を向け、一歩だけわたくしに近づきました。気がつく、アンリはもうわたくしが見上げなければいけない程、大人の様相でそこに佇んでいます。

「お久しぶりです。・・・ボクは今年で21歳になります。ア・・・。」

「アレクサンドリーヌと、以前のように呼んでくださらないの・・・。」

「？」

わたくしの恥ずかしげもない懇願に、アンリは深い抱擁のような穏やかな笑顔で答えてくれました。

「アレクサンドリーヌ。お会いできて・・・本当に嬉しいです。どうぞお座りください。」

絡み合ってほどけなくなっていた鎖が元の輪になるように、今までのはこりは彼のほころぶような笑顔に浄化され、どこまでも澱みなく続く川になつて胸のつかえも宮廷での悔しさも全て、押し流されてしまいました。わたくしのアンリは静かな森のようにどこまでも深く、やさしく包み込んでくれるのでした・・・。

アンリの暖かく広い胸に戻ってこれたことを神に感謝します。

夜の黙しじつに想いを籠め、このはちきれんばかりの瑞々しい愛は再び重なり合い、求め合い・・・

未枯れることのない緑の季節に永遠の誓いを立てた二人の魂を、神はこの一瞬の輝きの中だけに寄り添うことを許して下さったのでしようか・・・

わたくしの身体にいくつものバラ色の刻印を残し、熱くほとばしる愛の言葉を耳元で囁きながらこんなにもその青灰の瞳をなくして生きてはいけないと思わせてくれた悦びに胸ふるわせ、心の底から湧き起こる泉にすべてをまかせ・・・わたくしはこの時まさに人生の華を咲かすかのように激しくアンリに想い寄せて生きていたのです。

5月。

三部会が開催されると同時に、パリに異様な熱気が巻き起こるかのようにあちこちで争いが起こりました。テュイルリー付近のパン屋は店ごと叩き壊され、飢えた市民にパンと貯えの全てを略奪された上に惨殺されました。

宝飾品店には暴徒と化した市民が詰め掛け、店内の貴婦人から脅すだけ脅して金品を巻き上げ・・・

わたくしの両親はパリでの商売に見切りをつけると、不安定なパリの治安に恐れをなしドイツへといち早く旅立ちました。

度重なる王室側の締め出しに対し、平民議員はくじけもせずジュ・ド・ポームの誓いをたて、この混沌とした時世の荒波に向かって自らの信念と勇気を載せた船を漕ぎ出したのです。

時代は・・・すでに変わっていたのでしょうか。

そこからは何もかもが、風のように通り過ぎていき雪崩れるように新たな展開を生み続けました。

三部会から国民議会、平民議員の解散を目論んだ王室の放ったパリ市への進軍、圧倒的人気で国民の支持を受けていた財務長官・ネッケルの罷免、軍隊に対抗し、国民が編成した義勇軍による武器や食料の略奪・・・

すべてが神のおつくりになった壮大な物語ならば、何故このような血のにおいと硝煙のくすぶる歴史のページなどを認められたのでしたか

しょうか・・・？

7月に起こったテユイルリー宮広場前の暴動は、わたくしがブローニユの館で数人のお友達とイギリスからのお茶をいただいていた時に夫の側近からの急使で知りえたのでした。

ご一緒されていた貴婦人方は特に大した問題ではないと言う風に、お茶やお菓子をいただいておりますでしたが、わたくしはアンリの隊が出勤していたら・・・と思うと気がありません。

お隣に座ったマダム・エリオットはイギリスからいらした貴婦人であり、ドルレアン公の愛妾でした。

夫との繋がりがから我が家にもいらしてくださいなさるようになり、こうしてイギリス趣向の会には必ず出席して盛り上げてくださる少し年上の心強い友人でもありました。

「アレクサンドリーヌ、わたくしの愛しいお友達と貴女のご主人はすっかり反王党派の名義をいただいってしまったけれど、わたくし自身の心は常に王様のお傍にいますのよ。

わたくし自身の偽らざる気持ちは自由そのもののなの。

それがいけないとおっしゃるなら、わたくしのような人間は生きてはいけませんわ。」

グレース・エリオットはもっともらしく頷きながら、実はわたくしに言い聞かせているようでした。

わたくしは彼女の身の上を聞いた上で、そのたくましくも伸びやかな生き方に感嘆のため息が出たものです。様々な恋愛を繰り返し、そのたびに大きく艶やかに羽根をひろげてゆく蝶のように生きる彼女を人は高級娼婦クルチザンヌと呼びます。かつて少女だったわたくしがファルケンシュタイン伯をお慕いするあまり、そのお相手になったデュ・バリール夫人に対し燃やした怨念の言葉です。

大人になった今、なぜ殿方がこうした女性に心寄せているのかが判るようになりました。

燃えるような熱情を味わわせてくれ、なおかつしつとりとした森の泉のように清涼とし、余計な危惧は抱かせずにいつでも快活にふるまえる芯の強さ……

グレースのような強さと美しさがあれば、わたくしにもこの怒濤の世の流れに身を任せることが可能でしょうか……。

わたくし達のお付き合いはとても短い間でしたが、とても密に互いの心情を交し合えたのはよき思い出です。

暴動騒ぎの翌日、バステューユ牢獄の大砲はすでにパリ市内に向けられていたそうです。

陛下は王室に齒向かう者は国民ですら排除をするおつもりだったのでしょうか……？

武器を持ち、暴徒化したパリ市民の勢いはもはや留まることなぞ知らず、ついにはバステューユも市民の手に堕ちたのです。

夫は帰宅するなり、わたくしのブドワールの扉を開き

「マダム、わたし達の勝利はもうすぐですよ。

革命が始まります。外国に行く必要などないでしょう！」

と、珍しく興奮した様子で声高らかに言ったのです。

自由と平等をうたう「人権宣言」に続き、飢えと怒りにまかせたパ

リの女達によるヴェルサイユへの行進、王家のテュイルリー宮殿への移送・・・

革命は、次々に新しい事件という支流を生み増やしながら澱みのない大河のように一筋の広大な流れになりフランスを飲み込んでいくのでした。

宮廷にいた数少ない友人によると、先日王妃様に宛てられたお手紙の中にはかのサン・ジェルマン伯爵からのお手紙もあったのだそうです。

その手紙によると「海外に亡命されるよう」と強く進言されていたとか。

わたくしはサン・ジェルマン伯の言葉は今になってみて真実だと噛み締めておりましたゆえ、その友人にも早く宮廷を去るよう、忠告出来ました。

太陽はもはや沈みかけ、血の色に染められています。

王妃様や国王陛下が平民に対し圧政を行えば行うほど、両者の溝はこんなにも深く・・・涙と血にぬかるんでもはや埋めても埋めてもにじみ出る国民の叫びに抗うことは出来なくなっていたのです。

この年を境に、まるで大海に浮かぶ小船のような人生を送ることになろうとはわたくし自身、まだ気づくことが出来ずにいたのです。

アンリが神妙な面持ちでブローニユに來たのは、バスティーユが陥落した歳の瀬でした。

いつものようにブドワールに通し、お茶を運ぶ間にもアンリは考え込むようにソファにもたれながらその青灰の瞳をわたくしに合わせるのを躊躇っているようでした。

とりとめのない会話をつなぐのも居た堪れないと言った彼の様子に、わたくしが一抹の不安を覚えるのは至極当然です。わたくし達の間には遠慮も秘密もありません、どうぞお話しなさつてと促すとアンリはその端正な横顔に益々もって憂いをふくみ、

「いいえ、本当は言わなければいけない事なのに・・・愛ゆえにそれをボクの心が拒むのです。

貴女を永遠に失うのは、堪えられない。だから言わなければいけない、それは判っているのです!!

だけど、離れたくはない気持ちといつかは離れなければいけない気持ちはどうしてもこの身体の中で相容れずに・・・苦しいのです。」

そのような言い方をされれば、誰だって「関係の終わり」に聞こえてしまいます。

わたくしは息を呑み、次の言葉を待つ間にも頭が割れそうなほどの衝撃に堪えなければなりませんでした。

しかし、アンリの続けた言葉はその時のわたくしが想像もしていなかったものでした。

「アレクサンドリーヌ。どうか・・・どうかボクが貴女を見捨てるなどとは思わないでください。」

お願いがあります。　ボクの最後の・・・お願いです。

どうか、一刻も早く亡命してください。

これから先の国民の所業は、恐らく貴女方貴族には堪えられないものになるでしょう・・・

田舎に行くのは危険です。パリでの今回の事件（バスティーユ襲撃）があつてから、農村でもあちこちの貴族や領主の屋敷が襲われております。今やこのフランスでの貴族の地位は揺らぎ始めてきている・・・この波がパリに来てから逃げるのでは遅すぎるのです！！

ご家族とともに、どうか今すぐにでも国外の人脈をたどり、亡命の手はずを整えてください。

そうして下されると約束してくださなければ・・・ボクは・・・

ボクはもう二度と、貴女にお会い出来ません・・・。」

バスティーユ襲撃があつてから、全国の農民が蜂起して今まで自分たちから搾り取ってきた領主の持つ財産や借金の証文、食べ物略奪し廻りにされていると言う事は既に存じておりました。

しかし、そんな暴動がすぐそばまで来ている危機だとは、愚かしくもわたくしは理解しておりませんでした。夫はドルレアン公のお傍で平民議員に肩入れしている関係上、自分たちは正義を貫いている

と信じています平民から憎まれているのは王室・・・いえ、王妃様のみだと豪語している立場です。まさか自分にその憎しみの目が向けられていようとは露ほども思っていなかったでしょうが、

では、わたくしたちがヴェルサイユを退いてから夫の言う通りに田舎の領地に移っていたとしたら・・・？

今、わたくしはこうして恋人を目の前にしてのんびりとお茶を口に出来ていたでしょうか？

鎌と鋤くわを持った農民たちに屋敷を襲われ、絵画も衣装も宝飾品も奪われ、そして・・・

ああ・・・！！ 我ながらなんと世間の流れに疎いのでしょうか。

もし何かがひとつ食い違えば、あのバスターニーユで生首を槍先に掲げられたのは自分かも知れないのに！

では・・・

では、このフランスを捨ててたどり着いた先には安住の地があるのでしょうか。

外国に住み、慣れない環境に身をおき、恋人と離れ・・・

・・・無理ですわ。

わたくしにはこの美しい祖国を離れて暮らすなんて、絶対に無理です！！

「では、貴女は・・・

貴女の首をボクたちに刎ねろ、とおっしゃるのですか！？」

目に涙を浮かべたアンリの、哀しくも美しい表情を今こうして思い浮かべてみると切な過ぎて胸がしめつけられるのです。

そんな事を、愛しい人に言わせるつもりなどはありませんでした。ただひたすらアンのそばを、フランスの地を離れたくはなかっただけなのです……

「……申し訳ありません、こんな風に言つつもりではなかったのです。」

今すでに父のもとには……何人もの革命派議員が出入りしている状態なのです。

これはあまり好ましい状況ではありません。

いつだって、血を流す前にはボク達の家には人の出入りが激しくなる……今はその前触れです。

亡命するのに早すぎることはありません。

お金と旅券をすぐに用意して、出国の準備を進めてください。

ボクには……なにも出来ないのです。」

夫に話し、理解を求めようとしたが今の状況では無理なようです。

たかが一青年の世迷言と一笑に付され、拳句の果ては

「マダム、貴女は大体本当の貴族出身者ではないのですから大丈夫ですよ！」

パリ市民の皆さんも、仮に我が家を襲ったとしても貴女が素敵なパ

リジェン又だと判つてくださるはずでは？」

などと厭味ともとれる物言いをし、それを聞いたロレンツォに不快な頭痛をもたらししてしまう有様です。

ロレンツォは今度は自分の師匠もロンドンに渡るといふ事を聞き、わたくしにこう切り出しました。

「マダム・サンドリヨン。我々はアンリの助言に従い、来年中にはロンドンに渡りませんか？」

わたくしも来年の夏にはあちらの舞台に立つつもりです。

なに、アンリはこちらが呼び寄せしてあげたらよろしいではないですか。一生会えないという訳ではございますまい。

革命とやらが終われば、また我々の平和な日々が戻りましょうとも。

ですから、あんな政治家ぶっているご貴族様のご亭主殿は置いて、ロンドン見物のつもりで行かれてはいかがですか？」

ロレンツォの後押しもあり、わたくしと子供たち、二人の侍女はロンドンに居た遠い親戚筋を頼りにするという条件のもと、1790年の秋に向けてロンドンに出発することにしたのです。

それを知ったアンリは表面上は喜んでくれましたが、やはりお互いの寂しくも苦しい気持ちを抑えることなど出来ません。

わたくし達は以前にもましてひんぱんに愛を重ね、想いを告げ雨の日は詩の蔭に唇を交わし、風の吹く夜には燭台の灯に身を寄せ合い・
・月夜の森で、春の緑の丘で、夏のきらめくせせらぎに心震わせながら互いの存在に喜びをかみしめ・・・

わたくし達のイギリス行きを知ったオーロールは、短いお手紙をくれました。

先だって、あの王妃様の寵愛を受けていたポリニヤツク家の人々が王妃様の命令で亡命したあおりを受け、ヴェルサイユを次々と去る貴族で今やヴェルサイユには本当の貴族はいなくなり、オーロールもフランシーヌも思い切り自由に宮廷を満喫しているとの事。

レオナールは近衛で出世し、相変わらず貴婦人方をはべらせながら今はフランシーヌの恋人だそうです。

不思議と、こういった事実を聞かされてもなんら感情も高ぶることなく受け入れられたのは、その時のわたくしの心の平安が宮廷生活にはなく、すでに身近な人間に移っていたからなのでしょう。みな、それぞれの道でそれぞれが満足であればわたくしに口をはさむ権利などありません。

オーロールの言うように、わたくしには宮廷生活は向いていなかった。

ただ、それだけです。

あとはイギリスに渡る時をまつだけ……

だけど……

この美しい森を去り、わたくしの美しい思い出を手放し、水はなだに彩られたブドワールを離れるなどと、このわたくしに出来るのでしょうか……？

ましてやアンリと・・・そんなにも遠く離れて暮らすなどと・・・。

わたくし達がイギリスに発つという前日。

急使がやってきて館の扉を叩く音に侍女が応対しますと、なんと旅券が取り消されたというではありませんか。

一体、なぜかと問うと現在の夫の立場、つまり反王党派の人間に旅券の発行を中止していたのでした。

王党派とは名ばかりの貴族が自分たちの亡命手続きに忙しく、わたくし達を後回しにしておきながら権力を傘にかけるといふ、愚行に出てきたそうです。

ここまできて、未だに王党派の嫌がらせを甘んじて受けなければならぬ悔しさと理不尽さに、わたくしの心はオーロールの手紙を読むまでもなく、もはや貴族社会から遠く離れてしまったようです。

秋になる前には、一足先にロレンツォがロンドンへと発ちました。

ただそれだけで、なんだかブルーローニユは一段と寂しくなった気がしてなりませんでした。

冬前にきた手紙によると、ロンドンのサロンも悪くはないそうです。が、貴婦人の華やかさはやはりパリには劣るそうです。

親友は異国から気遣いをみせてくださり、恋人はわたくしを慎ましやかに見守ってくださいる・・・

心のすみによどみ始めた不安を認めつつも、まだわたくしの周りには革命の怒涛は達していなかったのでした。

確実に近づいてくる、別れの時を一瞬でも先延ばしにしたいくて旅券の申請を一時取りやめにしようかと思ってもアンリはそれを好しとはしませんでした。

今度は自分の父親の紹介という事にして、わたくしたちの旅券を申請しようと言い出したのです。

「アンリ、今回の申請でありなかったのだから、またムリでしょう。むしろわたくしは喜んでいるのです。」

あなたのそばにこうして一日でも長くいられるのですから・・・。」

そついうとアンリはつとめて冷静さを保ちながらも、こう言ったのです。

「いいえ、アレクサンドリーヌ。」

ボクは一日も早く、貴女方にフランスから出国してほしいのです。

来年・・・ボクは結婚するのですから。

幼馴染の女性で、マリ・ルイーズという娘で・・・ボクは・・・

」

その先は、何故か声が途切れ途切れにしか聞こえてきません……

・
アンリが結婚……

「……だから、貴女に出来うる限りの事をしてさしあげたいのです。」

ボクには、家の跡取りをつくる義務がある以上、この先はもう貴女と共に生きることは許されないのです……。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0367/>

青のブドワール

2010年10月11日04時11分発行